

八一 蜘蛛の機械學的思想

其の外之れに類する話は澤山あるので、蜘蛛に人を識別する知力の存することは殆ど疑ひのない所である。前編に述べた通り、蜂にも亦た此の識別力があるのであるから、蜘蛛が之れを有するのは決して怪むべきことではなからう。

八一 蜘蛛の機械學的思想

蜘蛛は蛛網を修繕する爲めに、極めて巧みな機械學的の工夫をすることがある。此れに就て、嘗てウェーヘル教授の觀察した甚だ面白い事實がある。或時蜘蛛が三角形に絲を張つて蛛網を造つて居た。其の二隅の支柱は高い處にあつたが、第三の支柱は地面に近い處にあつたから其處を通行する人の爲めに、屢々其絲が切られて大に困つて居た。そこで蜘蛛は之を免れる爲めに甚だ面白い工夫をした。一つの小さい石を持つて行つて蛛網の其の一隅にクツ着けて重りの如くに其れをブラ下げた。此の石の下がつた爲めに、前に絲の引かれて居たのと同じ方向に蛛網は廣がることに

なつたから、地面へ絲を張つて置く必要はなくなつた。即ち絲に依つて蛛網の一隅を地面へ引附けることを止めて、之れに代ふるに重りを用ひたのである。

ウードといふ人も亦た、暴風の爲めに蛛網が破られた時に、蜘蛛が此れと同一の方法に依つて其の蛛網を修繕した事實を擧げて居る。猶ほ其の外にも斯の如き實例は澤山あるが、之れに據つて見ると蜘蛛の知力の大に發達して居ることが分かる。地面へ絲を引く代りに、重りを下げるといふ様なことは、決して本能的の作用ではないので、經驗上から之れを工夫するのである。前に述べた通り、巧みに蛛網を造るのは全く本能によるらしく思はれるが、併し斯の如き機械學的の工夫は決して本能的の作用とは考へられない。

八二 蜘蛛の巧みなる運搬法

モルガンといふ人は、蜘蛛が大きな昆虫を運搬することに就て、面白い事實を報

八二 蜘蛛の巧みなる運搬法

八二 蜘蛛の巧なる運搬法
告して居る。

蜘蛛は蛛網の一隅に食物を蓄へる場所を造つて居るので、蛛網にかゝつた昆虫類は、皆其處へ運搬するのである。然るに大きな昆虫が係るときは、之れを運搬するは餘ほど困難である。だから此の場合には、甚だ面白い工夫をして之れを運搬して行く。先づ其の頭の方を、蛛網の重みな絲に固く縛り付けて置いて、其れから他の部分の絲を悉く切つて了ふ。さうすると、昆虫は唯だ頭の方だけで下がつて居ることになる。そこで昆虫の尾端に絲を付け、運搬せんとする方向へ向つて其れを強く引つ張るのである。其れて昆虫の軀の長さだけ位置を轉じたことになる。それから今度は尾端の方を蛛網の重みな絲に付けて置いて、頭の方の絲を全く切り放して了ふ。そこで昆虫は尾端だけで下かることになるから、今度は頭の方に絲を付けて前の通りに強く引つ張るのである。其れて又た昆虫の軀の長さだけ運搬される。斯の如き方法を幾回となく反復して、少しづつ之れを運搬し、而して遂に其の目的の場所に

達する。此れは實に巧みな方法と得はざるを得ない。斯る方法を工夫する以上は、其の智力の發達して居ることは又た明かである。

第二十二章 サソリの自殺

八三 光線の刺戟によつて自殺す

蜘蛛類に屬する動物で、サソリと稱する恐ろしい有毒な動物がある。此れは暖國に産する動物であるが、大に日光を嫌ふので、日中は木や石の下に隠れて居て、夜になると出て来る。此の動物の尾端は鉤状をなして居て、其處に毒腺がある。

サソリは火を見るとときには、其の尾端を以て自から己れを刺して自殺するものだといふ話が昔から傳はつて居る。而して詩人バイロンの如きも、其の詩のうち此の事を書いて居る。併し果して此れが事實であるか何うか、博物學者の大に疑つて居る所であつたが、之れに就て確かな觀察をした人があるので、其の事實なること

八三 光線の刺戟によつて自殺す

が證せられた。

八三 光線の刺戟によつて自殺す

ピッチデーといふ人はマドラスに於て、南印度産の黒色のサソリに就て之を實驗したことがある。而して其の報告は英國の『ネーチニア』といふ雑誌に掲げられて居る。次に述ぶるのは即ち其の記事の一部である。

或朝一人の僕が一匹の大きなサソリを捕へて余(ピッチデー氏自らいふ)の許へ持つて來た。其れは夜中の逍遙が餘り長がかつた爲めに、夜が明けて來て自分の隠場へ歸れなくなつた所を捕へられたものゝやうに思はれる。余は直ぐ其れを硝子戸の附いた昆虫箱へ入れて置いた。

午後になつて其れを見る爲めに、日のあたつて居る窓へ其の箱を持ち出した。ところが光線や熱は非常に強く其れを刺戟するやうに見えたので、そこで余は嘗て聞いて居た話を想ひ出した。可哀さうには思ふたけれども、其の話に就て實驗して見なくなつたので、レンズを持つて來て太陽の光線を集中してサソリの背部を輝らし

た。

此の光線の刺戟を受くるや否や、サソリは聲を立て、箱の中を狂ひ廻つた。四五回此の試験を反復して見たが、其の結果は皆同一であつた。猶ほ一回之れを施した所が、サソリは其の尾を曲げたかと思ふ間に、直ぐ己れの背中を刺した。其の迅速なことは實に電光の如くてあつた。而して其の傷口からは忽ち液汁が流れたが、僅かに半分時間もたない内に全く死んで了つた。

余が此の報告を書く目的は、サソリが自殺をすることゝ、彼れらが或種類の動物を殺す所の毒は彼等自身をも殺すといふことを示さんとする爲めである。

八四 蠟燭の火を見て自殺す

猶ほサソリの自殺に就ては、アーレン トムソン氏も充分信據すべき事實として左の如き記事を雑誌ネーチニアに載せて居る。此れはトムソン博士が或人の確かな

八四 蠟燭の火を見て自殺す

八四 蠟燭の火を見て自殺す

實驗談を紹介したのである。

其の實驗者は、或年の夏避暑の爲めに以太利のヌーテといふ浴場に行つて居た。然るに其處は幾らか湿地であつて、家の中へ侵入して來る程サソリが澤山居て、屢々夜具や衣類や、靴の中などに潜伏して居るやうなことがあつて大に困つた。そこで之れを驅除撲滅する方法に注意して居なければならぬことになつた。

其の時土地の人から面白いことを教はつた。それは突然光を與へるとサソリは自殺して了ふといふ話であつた。そこで早速その教はつた事を實行して見た所が、果して其の通りの結果があつた。其の方法は何うかといふに、サソリは日中は動けないものであるから、晝間之れを捕へて、コップで伏せて置き、夜に入つてから、突然蠟燭の火をコップの側へ近けたのである。

蠟燭の火の近くや否やサソリは大に騒いでコップの中を非常な速力を以て幾回となく駆け廻はる。凡そ一分間位此の状態が続くと、其れからサソリは突然静まつ

て尾を背中の方へ曲げて、自から頭の中央部を強く刺すのである。而して數秒間少しも動かずに居るが、忽ち死んで了ふ。此の方法を屢々施したが、何時も此の通りの結果を得るので、其の人は之れが爲めにサソリの害を免れることが出来たといふことである。

八四 蠟燭の火を見て自殺す

第六編 魚類の心理

第二十三章 魚類と昆虫との心理的比較

八五 形體の進化と心作用

解剖上に於て、魚類と昆虫類とを比較すれば、前者の後者よりも遙かに進んで居ることは、何人も知つて居る所である。昆虫の一部たる膜翅類、即ち蟻、蜂等の心作用が、驚くべき程發達して居ることは、前の數編に述べた所に據つて明かであるが、若し心作用は形體の進化と並行するものとすれば、魚類の心作用は、膜翅類などよりも、尙ほ一層發達して居なければならぬ譯である。

然るに實際に於ては決して其うでない。心理上から之を見ると、魚類は膜翅類よりも遙かに劣つて居る。其の本能といひ、知力といひ、到底蟻や蜂とは較べもの

にならない。それは今から段々述ぶる所に分からうと思ふが、要するに形體の進化と心の發達とは必ずしも平行するものではない。魚類は既に脊推動物であつて、形體の進化からいへば、蟻や蜂よりは餘程高等に位して居るが、其の心作用の發達は決して之れと伴ふて居るのではない。そこで、動物學上の階段は必ずしも心理學上の階段を定むるものではないといふことが分かる。

然るに此の不平行を否定せんとして、有名な學者フアン・バエル氏の如きは、『蜂の形體上の進化は決して魚類に劣つて居ない、唯だ其の模型が異なつて居るのみだ』と言つて居る。併し此れは到底吾人の承認することの出来ない説である。蟻や蜂の形體上の構造が、其の心作用の發達に伴ふほどまでに、魚類よりも進化して居るといふ事は、何人といへども發見し得ない所であらうと思ふ。だから形體の進化と心の發達とは必ずしも平行するものでないといふ事實は何うしても許さざるを得ない。

八六 神経に関する比較

前節に述べたのは、形骸一般の進化に就て言つたのであるが、其れは別にして置いて、單に神経系統のみに就いて考へたら何うかといふに、矢張前と同一である。魚類の大脳は脊椎動物中の高等なものに比較すれば、無論小さいに相違ない。併し之れを昆虫の胸神経球 (oesophageal ganglia) 或は腦髓に比較するときは、其の遙かに大なることは言ふまでもない。又た若し魚類の大脳を、蟻の腦のうちで其れに當たる部分と比較すれば、到底較べものにならざる程大なることは無論である。

だが、蟻は身軀が全軀小さいから、腦の比較をするに就いては、之れも一應考へなければならぬ。又た蟻は、無脊椎動物中にて章魚 (Octopus) 類を除くは、其の身軀に比して腦の特に大きく且つ特に發達して居るものである。此の事實も亦た考へなければならぬ。之れを要するに、魚類の腦は其の大きに於ても、構造の複雑な

ることに於ても、最も高等なる作用をなし得べき摸型に従つて造られて居るのであるが、併し同一の摸型に屬するもの (即ち脊椎動物) の中では、其の進化の最下級に立つて居るものである。然るに膜翅類即ち蟻や蜂の腦は、其の摸型からいへば一段下に立つて居るものであるが、同一の摸型に屬するもの (即ち無脊椎動物) の中では、進化の最高級に達して居るのである。之れ即ち作用の上に於ては、前者の尙ほ後者に劣る所以である。

第二十四章 魚類の感情

八七 感情の種類

魚類には、恐怖、嫉妬、怒り等の感情があり、鬭争を好み、遊戯を好む性質があり、社會的、雌雄的、親子的の感情があり、又た好奇心もある。感情の種類からいふと、蟻に具はつて居るものと大差なく、又た生後四ヶ月位の人間の子供に特固な

八七 感情の種類

る感情の種類と殆ど同一である。同情に就いては、未だ観察上確かな證據はないが、併し全く同情がないのでもない様に思はれる。

恐怖と闘争を好む情とは、魚類に於ては實に著るしく現はれて居るので特に證明を要しない。又た社會的即ち群居的感情は、群集して泳ぐ種々の魚類に於ては、大に發達して居る。又た雄雌的感情の現はるゝことは、雄が雌に媚を呈する動作に依つて證せられ、親子的感情の存することは、巢を造つて其の幼者を保護する動作に依つて證せられて居る。シュナイデル氏は、ナブルスの水族館に於て、種々の魚類が其の卵を保護する種々の事實を澤山觀察した。其のうちには、雄が卵の産み着けてある岩の上に登つて見張りをしたり、或は大きな口を開いて其の周圍を泳ぎ廻つて、敵の侵襲を防いで居るものもあつた。子を保護する感情の強いことは、此れらの事實に據つても分かる。

八八 魚の戀愛

刺魚トウモロコシの一種に英語でスチツクルバックと稱するもの(Gasterosteus pungitius)がある。此れは背中に十本の刺のある川魚で、巧みに巢を造る魚類の中に數へられて居るものである。此の魚の戀愛に就いて、嘗て或學者が面白い事實を觀察して居る。

先づ魚を飼つて置く硝子の箱を拵へて、其の中へ、巢を造り卵を産むに必要な水草や岩を適當に裝置して、其れからスチツクルバックの雄を一匹入れて置いた。其れから三日たつて後、既に成熟して居る雌を二匹入れた。雌の這入つたので雄は忽ち活潑になつて、藻の細片や、其の他の材料を集めて、岩の突端に巢を造り始めた。然るに、雄は巢を造る爲めに非常に忙がしく働らいて居るにも拘はらず、絶えず雌に注意して愛情を表出するやうな動作をして居た。其の動作といふは、頻りに鰭を動かして、雌の周圍を泳ぎ廻つたり、口を開いて咬み附く振りをしたりする様なこ

八八 魚の戀愛

八九 海馬の子に対する愛情

とてあつた。雄が暫らく斯の如くして居た後、雌は其れに感應した容子で、雄に導かれて巢の方へ泳いで行つた。併し容易に雌を巢の中へ伴れ込むことは出来なかつたが、雄は色々苦心をした後、遂に雌を巢へ導き込んだ。其れから雌は少しの間巢の中に留まつて居たが、其の間に卵を産み附けたのである。

そこで雄は巢の中へ這入つて、其の卵に受精をさせ、其れから雌を遠方へ追つてやつた。而して雄は其の巢を軽く打きつけて置いて、又た他の雌を求むる爲めに出かけた。始め巢を造りかけてから、雌を誘ひ込んで卵を産み付けさせるまでには二十四時間かゝつたのである。一たび其の卵に受精をさせてからは、雄は絶えず巢の番をして居た。

八九 海馬類の子に対する愛情

海馬即ち「タツノヲトシゴ」と稱する小さい魚類がある。此れは總鰓類 (Lophobra

nehi) に屬するもので、其の口は突出して管状をなし頸から上は恰かも馬のやうな實に奇妙な形をして居るものである。其の雄の方には腹部に囊があつて、其の中へ卵を入れて孵化させるのである。

此の魚類は、雌が卵を産むと、雄が此の囊へ入れて其れを孵化させるのであるが、形跡上斯る機關の具はつて居ると共に、其の子に對する愛情も亦た大に發達して居る。ミツソーといふ人の觀察した所によると、卵が孵化して幼魚となると同時に、其の親魚は雌雄ともに著るしい愛情を現はし、而して此の囊は幼魚の爲めに保護の場所となつて、何か危険に遭ふときは、幼魚は忽ち此の囊の中へ隠れるといふことである。

九〇 魚の産科術

鮓の一種に、英語でテレスコープフィッシュと稱するものがあるが、カーボニール

九〇 魚の産科術

九一 雌を慕ふ情

氏の言ふ所に據ると、此の魚類の雄は甚だ奇妙な産科術を本能的に行つて居るのである。

カーボニール氏は斯ういふ事を書いて居る。卵を以て躰の重くなつて居る一匹の雌を、三匹の雄が追ひかけ、其れを捕へて、恰かも球を轉がす如くに、數メートルの間其れを轉がして行つた。二日間少しも休むことなく、之れを反復したが、遂に雌は疲れ果て、一瞬間といへども自から身躰の均合を保つことが出来なくなつた。而して其の卵を悉く産み出して了つたといふことである。之れ即ち此の魚類の雄が雌に對して卵を産み出させる一種の方法であつて、ツマリ彼等が本能的に行つて居る産科術なのである。

九一 雌を慕ふ情

魚類には、産卵期になると、雌を慕ふ情の非常に強いものがある。エッセ氏は鰻

九二 魚類の友情

類の一種(Esox lucius)に就て之れを實驗して居る。此の魚類の産卵期に於て、氏は一匹の雌を捕へた所が、雄は水際まで其のアトを追つかけて來た。而して雌を見失つた場所何時までも留まつて居て、幾ら追つても其處を去らなかつたといふ事である。

魚類のうちには、甚だ友情の強いものがあるので、前節に述べたやうな事は、必ずしも雌雄の間のみ限らない。アルデロン氏はアセリナ セルナといふ魚に就て之れを實驗して居る。氏は此の魚を二匹暫らく一所に飼つて置いた所が、非常に親密になつた。其れから氏は其の一匹を離して他へやつた。ところが残りの一匹は非常に憂鬱になつて、食物を與へても食はなかつた。而して此の有様が殆ど三週間も續いたので、氏は其の魚の死せんことを恐れて、前に離した魚を再び入れてやつた。ところが、其の一所になつた時の喜びは實に形容の出来ないほどであつて、忽ち以

九二 魚類の友情

九三 怒りの情

前の通り活潑になつたさうである。
前に述べたエッセ氏も鯀鯀に就いて同種類の實驗をして居るが、其の結果は全く之れと同一である。

九三 怒りの情

怒りの情を表はすのは、多くの魚類に於て著るしい所である。殊にトゲウヲの如きは、最も著るしく怒りを表はす魚類である。トゲウヲには一種奇妙な本能があるので、一つの入れ物へ二三匹以上入れて置くと、必らず其の一部分を限つて各々己れの領分と定めるのである。而して隣りの魚が己れの領域を侵すときには、大に怒つて其れを攻撃する。其の有様は實に面白い。

ロマニース氏の言つて居る所によると、斯る場合には其の魚は身軀の色を變じて、侵害者の方へ突進し、一舉一動烈しい怒りを表はすのである。此れらの表出が全く

怒りの情の結果であるか何うか、其れは確かに言ふことは出来なないが、併し吾人は表出に依つて推定するより外に方法がないのであるから、斯る表出のある以上は、其の裏面に之れに對する感情の存するものとせざるを得ない。

九四 嫉妬の情

魚類に嫉妬の情のあることも亦た明かである。此れは多數の雄が雌を得んとして闘ふことに據つて證せられる。

シユナイデル氏の觀察に據ると、雄魚が嫉妬の情を起すのは、己れと同一種類の雄魚に對する場合にのみ限るやうである。例へば、己れの所有して居る雌魚の近傍へ、己れと同種類の魚の雄が來るときには、忽ち嫉妬の情を起して之れを追拂つて了ふ。併し己れと種類の違つた雄魚が、其の雌の傍へ近きて來ても、少しも其れを拒まないのである。

九四 嫉妬の情

九八 魚類の陸上旅行

ときに、不意に下から水の丸を以て射られ、水中に落ちて此の魚の餌となるのである。

斯の如く、水中から空中に飛んで居る小虫を射るには、其の距離を測定する爲めに視感と筋肉運動とを都合よく調和させなければならぬ、又た空中と水中とは光線の屈折する度が違ふから其の加減をもしなければならぬ。凡て此れらの加減をして其の狙ひを外さないやうにするのは、大に困難なことであつて、此れには餘程進んだ知力を要するのである。然るに此の魚類が何うして斯の如き知力を要する動作を巧みになし得るか甚だ解し難い。ロマニース氏は斯る動作は、始め此の魚類の遠祖か色々工夫して有意的になしたものが、遺傳して一種の本能となつたものに相違なからうと言つて居る。

九八 魚類の陸上旅行

魚類のうちには、是れまで棲つて居る場所に水が缺乏して來ると、水の澤山ある場所へ移る爲めに遠方へ旅行するものがある。鰻は此の奇異なる習慣を持つて居る魚類の一つであつて、夜中移住をするのである。

ドクトル ハンコックは英國の動物學雜誌に於て、ドーラスと稱する鰻の一種が、群をなして旅行することを報告して居る。此の鰻は長さばかりで、澤山群をなして、水を探し出す爲めに夜旅行をするのである。而して其の歩く方法は、胸鰭を足の如くに使用し、又た尾を動かすことに依つて、身軀を前の方へ推して行くのである。其の速力は殆ど人間の歩くのと違はないといふことである。

又たボスク氏の發見した魚で、カリフォルニアの淡水に澤山産する『ハイドラルグツラ』と稱するものがあるが、此れも亦た旅行する魚類の一つである。此の魚は鰻の歩き方とは違つて、跳んで歩くのである。而してボスク氏の言に據ると、此の魚は一番近い水の方へ向つて行く。ボスク氏は試みに、決して水の見えない場所へ此

九五 好奇心

九五 好奇心

何か新奇な物が水中に現はれると、魚は其の何たることを知らんとして近傍に集つて来る。此れ即ち魚類に一種の好奇心のあることを證するものである。

漁夫が此の好奇心を利用して魚を捕へるやうな場合が少くない。例へば、夜中火を持つて行くと、魚が澤山其の周圍へ集つて来るので、其れを捕へることがある。又た機關士のステフェンソンといふ人は、水中へ火の附いて居るランプを沈めてやると、魚が其れを怖んで其の周圍へ群集して来ることを觀察したと言つて居る。

第二十五章 魚類の奇異なる本能

九六 巧に他の魚を捕ふる奇計

アンコウと同じ種類の魚(Lophius piscator)は、其の突出した鼻の上に、糸のやう

な物を具へて居る魚がある。而して此の魚には奇妙なる習慣があるので、他の魚類を捕へんとするときには、泥か或は海草の下に己れの身体を匿し、而して其の糸のやうな物を水中で動かして居るのである。そこで他の魚類は、何か變なものが動いて居ると思ふて、其の傍へ集つて来るので、忽ち此の魚の爲めに捕へられるのである。

九七 泡を吹て小虫を射殺す

ケルモン・ロストラッスと稱する魚があつて、甚だ面白い方法で小虫を捕へる。其れは丁度吾人が銃を以て小鳥を捕へるやうな風に、自分の口から泡を吹いて、其れで小虫を射殺するのである。其の吹き出す力は非常に強く、又たよく狙ひを定めて吹き出すので、滅多に目的の外づれることはないのである。而して其の目的物となるものは、大抵蠅の如き小虫である。此れらの小虫は餘念なく水面に飛んで居る

九七 泡を吹て小虫を射殺す

九八 魚類の陸上旅行

ときに、不意に下から水の丸を以て射られ、水中に落ちて此の魚の餌となるのである。

斯の如く、水中から空中に飛んで居る小虫を射るには、其の距離を測定する爲めに視感と筋肉運動とを都合よく調和させなければならぬ、又た空中と水中とは光線の屈折する度が違ふから其の加減をもしなければならぬ。凡て此れらの加減をして其の粗ひを外さないやうにするのは、大に困難なことであつて、此れには餘程進んだ知力を要するのである。然るに此の魚類が何うして斯の如き知力を要する動作を巧みになし得るか甚だ解し難い。ロマニース氏は斯る動作は、始め此の魚類の遠祖か色々工夫して有意的になしたものが、遺傳して一種の本能となつたものに相違なからうと言つて居る。

九八 魚類の陸上旅行

魚類のうちには、是れまで棲つて居る場所に水が缺乏して來ると、水の澤山ある場所へ移る爲めに遠方へ旅行するものがある。鰻は此の奇異なる習慣を持つて居る魚類の一つであつて、夜中移住をするのである。

ドクトル ハンコックは英國の動物學雜誌に於て、ドーラスと稱する鰻の一種が、群をなして旅行することを報告して居る。此の鰻は長さばかりで、澤山群をなして、水を探し出す爲めに夜旅行をするのである。而して其の歩く方法は、胸鰭を足の如くの使用し、又た尾を動かすことに依つて、身軀を前の方へ推して行くのである。其の速力は殆ど人間の歩くのと違はないといふことである。

又たボスク氏の發見した魚で、カリフォルニアの淡水に澤山産する『ハイドラルグツラ』と稱するものがあるが、此れも亦た旅行する魚類の一つである。此の魚は鰻の歩き方とは違つて、跳んで歩くのである。而してボスク氏の言に據ると、此の魚は一番近い水の方へ向つて行く。ボスク氏は試みに、決して水の見えない場所へ此

九九 木に登る魚

の魚を置いて見たが、併し何に據つて知るものか、矢張り一番近い水の方角へ向つて行つたといふことである。

九九 木に登る魚

上に述べた如く、魚類には色々奇妙な習慣を持つて居るものがあるが、其のうちでも最も奇異なのは、『ペルカ、スカンデンス』と稱する魚の、木に登り上る習慣である。此の魚は『ス、キ』などと同じくペルカ (Perca) といふ一類に屬する鯉のやうな魚である。元來スカンデンスといふは『攀ぢのぼる』といふ意味なので、ペルカ、スカンデンスと稱するは『木に登るペルカ』といふ意味の名稱である。此の魚を始めて発見したのは、ゲルドルンといふ人である。

此の魚類は常に陸を歩くのみならず、自由に木に登ることが出来る。此の魚類の食物となつて居るのは、一種の甲殻類であるが、之れを探す爲めに棕櫚の樹へ

攀ぢ登るのである。而して其の登る方法は何うかといふに、此の魚には廣がつた鰓蓋があるが、先づ其れを開いて手の如くに使用して己れの身体を支へ、其れと同時に尾を横の方へ曲げ、次に臀鰭を木の皮にかけ、そこで尾を真直に伸ばすから、身体は自然に上の方へ推し上げられる、又た其れと同時に身体の進行を妨げない爲めに、鰓蓋を閉づるのである。即ち斯の如き動作を反復して、一步一步と上の方へ進んで行くのである。

一〇〇 鮭の河へ上る習慣

鮭は産卵期になると、毎年必ず河へ上るのである。同一の鮭が毎年必ず子を産むか何うか其れは確かには分らないが、併し同一の鮭が産卵期になつて屢々同一の河へ上つて來ることは確かである。此れは鳥の如くに場所を記憶して居る爲めか、或は此の魚は他の時期には棲み慣れた沿岸から遠く離るゝことはなくして、産卵期

一〇〇 鮭の川へ上る習慣

になると河を尋ねるから偶然以前の河へ行くことになるのか、何れかであらうと思ふ。スヘンサー氏などの説に據ると、後の方が事實らしく思はれる。

鮭が卵産期に於て、非常なる努力を以て、一切の障礙物に打勝ち、而して河上へ溯つて行く其の距離の遠いことに就いては實に驚かざるを得ない。例へば、エルベ河を溯つてヘーメンに達するものがあり、或はライン河を溯つてシュツアインに至るものがある。

米國にマラグノンといふ河がある。此の河は非常な急流であつて、河口から水源に至るまでは三千マイルもある。然るに、キルビー氏の言つて居る所に據ると、鮭は僅かに三ヶ月で此の河の水源に達するものである。而して急流に於ては、一日平均四十マイルを進み、平流に於ては、其の四倍の割合で進むといふことである。斯の如く急流を溯るには、其の尾は非常な強い機關となり、其の筋肉は驚くべき力を現はすのである。而して尾を曲げて口へ喰へると、實に強いバネとなるので、

其れを急に放すときには、一丈二尺から一丈五尺までの高さに跳び上ることが出来る。彼れらが恐ろしい瀑布を越えて行くのは、全く此のバネの力によるのである。

第二十六章 魚類の知力

一〇一 警戒

同一の場所で屢々魚を捕へると、魚は其の場所に就いて警戒することが強くなつて、段々其處へ近かなくなつて了ふ。之れ魚類に少からざる知力の存することを示すものである。又た斯る警戒は概して幼魚よりも老魚に多い。此の事實に徴しても亦た魚類は經驗に依つて知識を得るものであるといふことが分かる。又たキルビー氏の觀察に據ると、鯉などは、網を打つと其れを潜る爲めに、泥の中へモグツて了ふ。然るに若し其の底が石地であれば、彼れらは高く跳び上つて網を越えるのである。

一〇一 音響を聞いて集る

又はアングマン諸島に於ては、入江の口に魚梁を造つて魚を捕へるのであるが、一週間も續けて居ると、全く魚は來なくなる。此れは恐らく魚梁の内へ一たび這入つたものは決して再び出て來ることのないのを知り、恐れて其の場所へ近かなくなるものに相違ない。要するに、此れらの事實に據つて考へても、魚類に幾分か知力作用のあることは疑ひのない所である。

一〇二 音響を聞いて集まる

ラスベード氏は、或種類の魚は、多年一定の名を以て呼ばれると、遂に其れを覚えて、其の名を聞けば忽ち出て來ると言つて居る。併し此れは唯だ其の聲の音響を肥應するに過ぎないので、言葉を肥應して居るものではなからうと思ふ。

魚が己れの名を肥應するといふことは容易に信じ難い所であるが、併し食物を與へるときに、何時も一定の音響を聞かせて置くと、其の音響と食物とが魚の腦裡に

於て聯合して、同一の音響を聞けば、其れに依つて呼び出されるやうになることは事實である。獨逸などに於ても、ウグヒや鯉などを飼つて居る人が、それに食物を與へるときに、鐘を鳴らして呼び出すやうである。又たサー・ジョセフ・バンクスといふ人は、自分も此の方法で何時も魚を呼び集めて居るが、此れと同一の事は、方々の地に於て種々の魚類に就いて行はれて居ると言つて居る。日本で手を打つて鯉を呼び出すが如きも、亦た此れと同一である。

一〇三 鮫の案内をする魚の話

青魚に類した魚で、英語でパイロット、フイツシュと稱するものがある。パイロット、フイツシュといふは、『案内をする魚』といふ意味であるが、なぜ斯の如き名が附いて居るかといふと、鮫が食物を探しに行くときに、此の魚が何時も其の先きに立つて案内をして行くといふ想像から斯る名稱が附いたのである。此の魚は案内

一〇三 鯨の案内をする魚の話

をして行つて、食物を見出すとそれを鯨に教へ、又た其の食物が何か危険なものであると、鯨が其れを喰はないやうに妨げるといふことである。

船長リチャーズ氏の航海中に自から自撃したといふ面白い話がある。或日、鯨を捕へる爲めに船の上から餌を投げて置いた所が、一匹の青鯨が其れを追つかけて来た。然るに其の鯨に四匹の案内魚が附いて居たので、鯨は屢々其の餌へ近づいたが、鯨が其れを喰はんとすると何時も一匹の案内魚が其の前へ突進し、之れを妨げて喰はせなかつた。暫らくすると、鯨は餌を見捨て、遠方へ行つて了つたが、間もなく突然引つ返して来て、船後にある餌に向つて急進した。案内魚は其れを見て、大急ぎで追つかけて来たが、未だ追つ附かない前に、鯨は其の餌を喰へたので、遂に捕はれて了つた。

鯨が船へ引き揚げらるゝ時には、一匹の案内魚は鯨の脇腹に絡つて、水際を離るゝまでは何うしても去らなかつた。而して鯨が全く引き揚げられて了つたら、四匹

の案内魚は暫らくの間、其の周囲を泳ぎ廻はり、非常に哀しげな容子をして、其の奪はれた友を切りに探して居るやうであつた。

以上の觀察に就いては、コロネル スミスといふ人も確實に保證して居る。然るに之れと全く反對に、ゼオンレーといふ人は、案内魚が鯨を餌のある處へ連れて來ようとして大に苦心して居るのを見たと言つて居る。想ふに、案内魚が鯨に附いて居るのは、鯨が得た食物の碎片を拾はんが爲めであつて、又た其の餌を取るのを妨げるやうに見ゆるのは、或は心理上何んらの意味もないことかも知れない。併し案内魚といふものは、奇妙なことをする魚と想像されて居るから、兎に角その話を茲に掲げたのである。

一〇四 魚と鯨との激戦

硬骨類の一種に劍魚と稱するものがある。此れは上顎の先きが長く尖つて劍の如

一〇四 魚と鯨との激戦

くになつて居る魚類である。此の魚と狐鮫 (Alopias vulpes) と稱する一種の鮫とが、同盟して鯨を攻撃し、大激戦をやるといふ話がある。其の一つの實例として船長アルン氏が地中海を航海中に目撃した面白い事實を挙げよう。此れはデーといふ學者が確かな事實として自から引用して居るものである。

極めて穏やかな或朝、海面に於て魚類と鯨との激戦が起つたので、船員一同甲板に出て細かに其れを目撃した。一方は數匹の狐鮫と劍魚で、他の方は一匹の巨大なる鯨であつた。此の時は丁度夏の中頃で、天氣は晴朗であり、且つ其の激戦は船の極く近くに於て起つたのであるから、世間で謂ふ魚と鯨の戦争を實地に目撃するに實に好機會であつた。

戦闘が益々激しくなつて、鯨の背が水面に現はれたと思ふ間に、數匹の狐鮫は空中五六ヤードの高さに跳び上り、鯨の上に急激に墜下し、其の長い尾を以て之れに激しき打撃を與へた。其の音は恰かも遠方の銃聲を聞くが如くてあつた。又た劍魚

は其の鋭い劍を以て下から之れを攻撃し、激しく其の腹を刺した。鯨は斯の如く八方から攻撃を受けて、全身傷けられたので、其の周囲の水面は血を以て紅く染められた。而して全く船から見えなくなるまで長い間劍魚と狐鮫とは斯ういふ風に力を協せて其の鯨を惱まし傷けて居た。遂に鯨は全く敗北して死んで了つたに相違ない。(以上は船長アルン氏の物語である。)

一〇四 魚と鯨との激戦

一〇五 場所の觀念

第七編 蛙類及び爬虫類の心理

第二十七章 蛙及び蟾蜍

一〇五 場所の觀念

蛙の種類は色々あるが、心理上此れらに就いて述ぶべきことは極僅かしかない。併し場所に関しては、蛙は確かな觀念を持つて居るらしい。此の事に就いて研究したものは澤山あるが、其の一例を挙げれば、二三百ヤードも離れた處へ移されても、能く其の場所を記憶して居て、再び歸つて來るといふやうな事がある。

此れは或は以前接んで居た場所の濕氣を感じ、其れに導かれて來るのかも知れない。併し其れにしても、其の濕氣を感じる距離の大なることは實に驚かざるを得ない。ツアルデンといふ人の舉げて居る一つの面白い事實がある。蛙の澤山接んで

居る池があつて、或時その池が全く水涸れになつて了つた。ところが其の蛙は、水のある場所のうちで最も近い處へ、一直線に行つて了つた。而して其の距離は八キロメートルもあつたのである。何うして斯る遠方の濕氣を知覺することが出来るか、實に不思議である。

一〇六 蟾蜍の産科術

蟾蜍のうちに、『ブフォ、オプステトリカンス』と稱するものがあつて、甚だ奇妙な本能を具へて居る。維典語でブフォ(Bufo)といふは蟾蜍のことで、オプステトリカンス(obstetricans)は『産ませる』意味である。それで、『ブフォ、オプステトリカンス』といふは『産科術を行ふ蟾蜍』といふ名稱なのである。

此の動物の奇妙なる本能といふのは、其の名稱の示す通り、雌が卵を産むときに、雄が産科醫となつて其れを産ませることである。誰れも知つて居る如く、蛙類の卵

といふものは、膠様の長い紐に附着して居るのであるが、産卵の時には、雄が此の膠様の紐を雌の身軀から引き離すのである。斯ういふ風にして雌に卵を産ませるので、實に面白い産科術を本能的に行つて居るのである。

一〇七 蟾蜍の鯉を殺す習慣

デニセミン氏の研究に據ると、蟾蜍には猶ほ一つの奇妙な習慣がある。其れは鯉を殺す習慣である。何ういふ風にして殺すかといふに、鯉の頭の上に俯伏になり、兩方の前肢を其の眼に押しあて、之れを殺すのである。何の爲めに斯る奇妙な習慣が起つたかといふに、此れは恐らく蟾蜍の方の色慾興奮の爲めに起つたものらしく思はれる。

一〇八 蛙は己れの名を覺ゆ

蛙は能く自分の名を覺え、呼ばれると忽ち出て来るやうになるものだといふ話があるが、之れに就いてロマニース氏は一つの實例を擧げて居る。而してロマニースは此の實例は充分信據するに足るものだと言つて居る。

或人が池に一匹の蛙を飼つて、其れに『トムミー』といふ名を付けて居た。而して其の池の周圍にある柵の門を開くたびに、其の名を呼ぶことにして居たが、其れを聞くと必ず蛙は草藪の中から出て、其の人の傍へ泳いで來た。又た時によると手の上に登つて來ることもあつた。

此の蛙に食物を與へるのは唯だ朝ばかりであつたが、併し何時呼んでも、唯だ『トムミー』といふ聲さへ聞けば大抵出て來たといふことである。此れは充分馴れた結果であらうと思ふが、併し幾分か其の腦裡に觀念の聯合が出来たものらしい。

又たテネットといふ人も、蟾蜍に就いて之れと類似の事を書いて居る。氏は一匹の蟾蜍を三十六年間飼つて居たが、其の蟾蜍は氏の友人を悉く覺えたといふことで

一〇八 蛙は己れの名を覺ゆ

ある。
一〇九 天候の變化を豫知す
一〇九 蛙の鋭敏なる觀察力

一〇九 天候の變化を豫知す

蛙に天候の變化を豫知する能力のあることは疑ひのない所である。彼れらは天候の變せんとするときには、未だ人間の感じない内に、豫じめ之れを知つて、忽ち其れに順應すべき動作をする。之れ蛙を觀察した人の皆知つて居る事實である。何うして蛙に斯る不思議なる能力があるかといふに、それは知力の發達に由るのではなくして、寧ろ感覺の鋭敏なることに由るものであらうと思はれる。

一一〇 蛙の鋭敏なる觀察力

スコットランドの博物學者でエドワードといふ人は、蛙が驚くべき觀察力を持つて居ることに就いて、自から經驗した次の如き事實を擧げて居る。

或月明の夜、澤山の蛙が騒しく鳴いて居たが、何うした譯か突然黙つて了つた。そこでエドワード氏は甚だ不思議に思ふて、其の周圍を見廻はした處が、一羽の鼻が其の近傍の低い土堤の上に、少しも音のしないやうに極靜かに、下つて居たといふことである。
之れに依つて見ると、蛙は人間の感じないやうな微かな響にも能く感じ得るものと見える。

第二十八章 爬虫類

一一一 蜥蜴の感情

他の冷血脊椎動物に於けるが如く、爬虫類も亦た其の性質の痴鈍で、心作用の劣等なることを以て其の特性として居る。併し其のうちにも活潑なる感情や、鋭敏なる知力を具へて居るものが全くない譯ではない。次に述ぶるのはトムソン氏の擧げて

一一一 蝮蛇の感情

居る事實であるが、これらは即ち其の一實例であらうと思ふ。

蝮蛇の一種で『ラセルタ、イグワナ』と稱するものがある。此れは自然の性質からいふと、極めて柔和で、人に害を與へることのない動物である。然るに、恐怖か或は怒りの情の激動するときには、其の容子は全く之れと反対になる。其の眼は恰かも烈火の如く輝いて来る。又た蛇の鳴くやうな聲を發し、喉の下を膨らまし、長い尾を振り廻はし、背中の鱗を逆立たせ、廣い顎を押し開き、全身に結節を生じ、恐ろしい威迫的狀態を示すのである。

又た春季になると、其の雄は雌に向つて非常に強い愛情を現はして来る。而して如何なる動物たるに拘はらず、若し雌に害を與ふるやうな傾向の見ゆるものがあれば、極力之れを攻撃し、殆ど狂氣の如くなつて其の雌を保護するのである。又た此の時期になると、妄りに人に噛み附く。其れは決して有毒な譯ではないが、併し餘ほど固く噛みつくので、其の鼻を激しく打つか、或は殺さなければ離れないといふ

ことである。此の動物は通常の場合に於ては、至つて柔和無害であるが、一たび感情が激するときには、斯の如く恐ろしくなるのである。

一一二 鰐の本能

鰐魚類は生れながら噛みつく本能を具へて居る。バレット氏は、將に孵化せんとするアリガトル(鰐魚の一種)の卵を小刀で切り破つて見を出したことがある。其の小さいアリガトルは未だ眼を開いて居なかつたが、卵殻を出るや否やバレット氏の指を攫へて無暗に噛み附かんとした。

又たドクトル、デツイも生れたばかりのクロコチル(鰐魚の一種)に就いて甚だ面白い觀察をして居る。デツイ氏は卵を破つて、クロコチルの見を出した所が、其れは忽ち附近の河に向つて一直線に逃げ出した。そこでデツイ氏は其の方向を轉じさせる爲めに、杖を置いて其の進路を遮ぎつて見た。ところが決して其の方向を轉ぜ

一二三 龜類の方位を知ること
ぶるのみならず、強く其の障礙物に反抗し、而して大きなクロコデルのなす通りに怒りの態度を現はした。

一二三 龜類の方位を知ること

ハンボルト氏は生れたての龜に就いて、上に述べたのと全く同一の観察を施した。龜の子が卵を出るのは一般に夜中と定まつて居る。だから彼れらは其の求むる水のある方角を知る筈はない。然るにハンボルト氏の観察に據ると、彼等は卵殻を出づるや、忽ち水のある方角に向つて駆け出すのである。此れ彼等に方位を知覺する能力があつて、其れに導かれるのでなければならぬが、其の方位の知覺は何に由つて出来るのかといふに、其れは水のある方角の空氣が濕氣を含んで居る爲めであらうと思はれる。

又たハンボルト氏は一步進んで面白い實驗を行つた。卵から孵化したばかりの龜

を袋に入れ、海岸から餘ほど離れた處へ行き、を尾海岸の方へ向けて放した。然るに其の龜は忽ち向きを變じ、海の方へ一番近い路を取つて直ぐ歩き出した。ハンボルト氏は數回此の實驗を反復して見たが、其の結果は何時も同一であつたと言つて居る。實に奇妙である。

一二四 龜が卵を産むときの注意

龜類が卵を産むときの注意は實に周到なものである。だから之れを観察するには甚だ困難であるが、色々苦心して之れを観察を遂げた人があつて、ベートといふ人の博物書のうちに其の事が出て居る。

彼れらは産んで置いた卵を他の動物に取られないかといふことを非常に恐れる。だから卵を産むには、他の動物が決して發見し得ないやうな場所へ、夜中極密に行つて、産んで来る。若し其の附近に漁夫の火でも見えて居るか、或は人間の居る音

一一四 龜が卵を産むときの注意

でも聞えて居るかするときは、決して卵を産みに出かけることはない。
 又た其の場所は河或は海に近い砂地である。砂地を堀つて其の中へ卵を産むのである。然るに其の場所を擇ぶには餘ほど注意して、地面の一番高い所を擇ぶ。此れは卵の孵化する前に、何んなに雨天が續いても、水に浸さるゝ憂ひのない爲めである。斯の如きことを見ると、龜には將來を豫想する心作用がありさうに考へらるゝが、併し此れは他の動物に於ても見る如く、全く無意識の習慣によつて爲すものに相違ない。唯だ其の結果が意識的に考慮したること、同一になるに過ぎないのである。

産卵期に於て彼れらの最も忙しい時刻は、夜中から夜明けまでの間である。此の間に彼れらは砂地に於て切りに深い穴を堀るのである。而して其の穴の深さは三尺餘に達する。先づ一匹の龜が其の底へ卵(凡そ百二十位)を産んで、其の上に砂をかける。次の龜が其の上に又た卵を産み、前と同様に砂をかける。斯の如くにして

其の穴の充つるまで、其の上へ、上へと卵を産むのである。而して一群の龜が全体卵を産んで了ふまでには、間斷なしに産んでも十四五日間もかゝるといふことである。

一一五 鱈魚人に懐き猫の友となる

鱈魚は卵虫類中の最も猛惡なもので、人間を見たら直ぐ咬み附くやうな恐ろしい動物である。然るに此の鱈魚がよく人間に懐き、且つ猫を己れの友として非常に愛した一つの實例がある。此れは博物學者のエッセといふ人が充分信據すべき事實として其著書のうちに載せて居ること、氏の一友人が米國に於て自から經驗した所話である。

エッセ氏の一友人に、米國政府へ九年間技師として雇はれて居た人があつた。其の人か或河の工事を監督して居る時に、偶然一匹の若いアリガトル(鱈魚の一種)を

一一五 鯉魚人に懐き猫の友となる

捕へた。其れを飼つて馴らした所が、充分懐いて其の人のアトへ附いて犬の如くに家の周囲を歩き廻はり、或は二階へ這ひ上りなどして、大に愛情と順良とを表はした。

然るに此の人の家に一匹の猫が飼つてあつたが、アリガトルの最も好むものは其の猫であつた。猫とは親しい友達になつて、互ひに愛し合つて居た。猫が火の傍へ来て息んで居るときには、其の側へ横はり、猫の上に自分の頭を載せて眠つて居た(此の事はニューヨークに於いてあつた)。而して猫の居ない時にはアリガトルは何時も不安の容子であつて、猫が傍へ来ると大に喜んで活潑であつた。

又た此の人の家に狐が飼つてあつて、何時も其れが庭に繋いであつたが、アリガトルは大に之れを悪んで非常に苦しめた。アリガトルが天性の猛悪残忍を表はすのは、唯だ之ればかりであつた。始めアリガトルが戯れたのを狐が怒つた爲めに、斯の如く悪意を懐くに至らしめたりしい。アリガトルは狐を攻撃するには口を以てせ

ず何時も尾を以つて大に之れを打ち、殆ど死に至らしむる程であつた。

アリガトルの食物は生の肉ニクであつて、時々牛乳を與へることもあつた。牛乳は大に好んで居た。寒い天氣には何時もアリガトルは箱へ入れられ、毛布で包まれて居た。然るに或寒い夜、飼主が全く之れを忘れて、一夜霜の中へ棄て、置いたので、翌朝になつたらアリガトルは凍えて死んで居たといふことである。

此れは餘程珍しい話であるが、併し鯉魚類が人間に懐いた實例は嘗て此の類に此れのみではない。ブルメンバツハといふ人も、クロコデルの人間に馴れた例を擧げて居る。

一一六 大蛇の知力及び感情

西米利加の熱帯地方に居る大蛇で『ボア、コンストリクトル』と稱するものがある。此れは蛇類のうちで最も大なるものである。嘗て英國に此れらの珍しい蛇類

一一六 大蛇の知力及び感情

一一六 大蛇の知力及び感情

を集めて、己れの家の中へ飼つて居る人があつて、世間の問題になつたことがある。其の時ウオター・セヴァルンといふ人か其の現状を見て来て、之れを委しくタイムス新聞へ掲げた。左に述ぶるのは、即ち其の一部分である。

余(セヴァルン氏)は蛇の飼主エム氏を訪ふて暫らく談話をした後、エム氏は余に、君は蛇を恐るゝことはないかと問ふた。余は左程恐るゝことはないと答へた所がエム氏は戸棚から一匹の大きな『ボア、コンストリクトル』と一匹のコヘラの鱗蛇と数匹の小さい蛇とを伴れ出して来た。彼れらは能く馴れて机の上や、書物の間などを這ひ廻つて居た。余は始め大いに驚いた。殊に二匹の大蛇がエム氏の身体に巻き附いて又形の舌を出し、光つた眼で余を眺めたときには、一層恐ろしく感じた。併し馴れて居ることを知つたので、其れからは恐れなくなつた。

暫らくするとエム氏は、妻を呼んで来るからと言つて、其の大蛇を残して他の室へ行つて了つた。余は大蛇が段々余の方へ近づいて来たときには少しく氣味悪く感

じた。併し間もなく主人夫婦が二人の可愛らしい女子を伴れて這入つて来たので、余は再び安心した。互に一通りの挨拶を終ると、エム夫人と小供とは忽ち大蛇の傍へ寄つた。而して最も愛らしい名を言つて大蛇を呼び、思ふまゝに自分の身体に巻き附かせた。余と長時間談話をして坐つて居たが、此の有様を見て唯だ驚くの外はなかつた。

二人の美しい少女は母と共に余の前に坐つて居た。大蛇は戯れて婦人の腰や頭に巻き付き、又た其の頭の周圍に帽子の如くになつて、丁度猫の兒を見るやうに愛されることを待ち設けて居た。二人の少女は幾回となく大蛇の頭に抱きつき、又形の舌を押し除けて其の口に接吻した。大蛇は極めて其れを喜んで居る容子であつた。だが屢々不思議さうな眼つきをし余の方に振向いて居た。併し余が一たび自分の足に棲まることを許してから、余に對して不思議さうな容子をしなくなつた。

エム夫人が室内を歩くとさや、起つて咖啡を搦いて居るときに、此の勇ましい大

蛇が其身軀からだに巻き附いて居るのを見るほど美麗に感ぜらるゝものはなからう。其の黒い天蛾絨の服に、巧みに巻きついて居る有様は、丁度美麗な彫刻を見るやうであつた。余は殆ど歸ることを忘るゝ程面白く感じたので、其の後少したつて一友人と共に再び此の家を訪問した。

エム氏の伺つて居る蛇は極めて従順であつて、よく命令に従つて居た。戸棚へ這入つて居れと命じて置くと、必らず戸棚の内に留まつて居たのである。

一年ほど以前にエム氏夫婦は六週間ばかり不在になつたので、其の間大蛇は動物園の番人に預けてあつた。ところが大蛇は大に元氣がなくなり、眠つてばかり居て愉快に遊ぶことをしなかつた。然るにエム氏夫婦の顔を見たら、喜んで跳び上がり忽ち其の身軀からだに巻き附いて、非常に愉快なる容子を示したといふことである。

以上はウオター・セヴァルン氏の觀察談であるが、此れに據つて見ると、此の種の蛇には少くとも六週間以前の記憶が明かにあり、又た己れの愛される人に向つては

著るしい愛慕の情を現はすといふことが分かる。

一一七 蛇の魅惑に就て

昔から、蛇が他の動物を魅惑するといふことを世間で言つて居る。爬虫類を述ぶるに當ては、此の事を一言して置く必要があらうと思ふ。

ペナント氏は響尾蛇(rattle-snake)と稱する毒蛇の魅惑に就いて一つの事實を擧げて居る。此の蛇は往々樹の下を這つて居て其の上に登つて居る栗鼠を魅惑することがある。蛇が栗鼠を見詰めて居ると、其の時から栗鼠は逃げ出すことが出来なくなつて、物凄ものごろい聲を立て、鳴き始める。而して其の鳴聲なまひこゑは傍そばを通ほる人が聞いて、蛇の居ることを忽ち知るほど能く分つて居るのである。

其れから栗鼠は其の樹を少しづつ上のぼつたり下くだつたりして居て、遂に段々下つて地面に近づいて来る。其の間蛇は少しも眼を離さず栗鼠を見詰めて其れに注意を集め

(〇一二) て居るので、人が偶然其の近くへ行つても決して氣が附かない。栗鼠が段々地面へ近づいて来ると、蛇は大きな口を開いて其れを待ち受けて居る。そこで栗鼠は遂に蛇の口へ跳込んで其の餌となつて了ふのである。

ルヴェーラン氏も亦た自から自撃した所に據つて蛇に魅惑力のあることを確かめて居る。氏は或時一羽の鵙つぐが、樹の枝に留まつて恰かも痙攣を起したやうな風に顫へて居るのを見た。其れから其の近傍を見廻はしたら、凡そ四尺ばかり離れた他の枝に於て、一匹の大蛇が頸を延ばし、鋭い眼を以て切りに其の鵙を見詰めて居た。而して其の鵙の苦惱は、運動の力を全く奪はれて了ふほど激しかつた。そこでルヴェーランと共に其れを見て居た一人が其の蛇を殺して了つたが、鵙は其の枝に留つたまゝ既に死んで居た。其れから鵙を取つて檢して見た所が、其れには少しの傷もなく、全く恐怖の爲めに死んだことが分つたのである。

又たルヴェーラン氏は猶ほ一つの事實を舉げて居る。一匹の小さい鼠が、前と同

じやうな痙攣の状態にあるのを見たから、其の周囲を見廻はしたら凡そ二ヤードばかり離れた處に、一匹の蛇が居て切りに其れを見詰めて居るのを發見した。其の蛇を追つて遣つて、鼠を取つて見たが、手のうちで死んでたといふことである。

一一八 蛇の魅惑は如何に説明すべきか

上に述べたやうな現象は實に不思議なこと、謂はざるを得ない。併し此れに類した報告などは、此の外にも澤山あるので、全くこれ無根の話とすることは出来ない。然らば此の現象は如何に説明するべきものであるか。

或學者は、蛇が他の動物を魅惑するといふのは、唯だ恐怖の情を起させるに過ぎない、蛇に見詰められると恐れて動けなくなるのであると言つて居る。科學的に之れを観察する機會を得た人は、凡て斯うふ意見を持つて居るやうに見える。

想ふに、上に述べた如き小さい動物が、偶然蛇の己れを見詰めて居ることを見る

一一九 蛇の音楽に感ずること

爲めに、其れに驚かされ、其の結果として一層蛇の餌に陥りやすくなることに過ぎないらしい。而して或場合に於ては、其の恐怖の強烈なる爲めに、其の動物をして上述の實例に於けるが如き状態に陥らしむることもあらうと思ふ。何れにあれ、蛇に他の動物を魅殺するが如き一種特別の力があるものとは考へられない。蛇が見詰めて居る爲めに實際動けなくなつて、其のまゝ死んで了ふやうなことが果して事實であるとすれば、其れは突然恐怖の情に打たれた結果と考へなければならぬやうに思はれる。併し果して事實の觀察に間違ひがないか、何うか此れは大に注意を要する點である。

一一九 蛇の音楽に感ずること

蛇のうちには音楽に感動して、其の音を聞くと、忽ち穴の中から出て来て踊るものがある。例へば印度に『コーブラ』と稱する毒蛇があるが、此れはよく笛の音に感動

し其の穴から出て来て踊るのである。又た其の他の蛇に於いても、笛の音を聞くと大に感動するものがある。

嘗てレインといふ人は、印度に於て自からこれを實驗して居る。印度人たは、笛を吹いてコーブラを呼び出し、其れを踊らせるものがある。そこでレイン氏は若しや前に蛇を馴らして置いて、さういふ事をするのではないかといふ疑かあつたから充分其れを吟味した上で、此の實驗を施したのである。

レイン氏は一人の印度人に導かれて、コーブラの居さうな草藪へ行つた。そこで其の印度人は笛を吹いたら、果して一匹の大きなコーブラが蟻塚の中から出て來た。人を見たので、其の蛇は逃げかけたから、印度人は尾を捕へ、其れを振りながら小舎まで持つて來た。そこで彼れは其の蛇を踊らせた。ところが忽ち蛇に膝の上を咬まれたので、彼れは直ぐ其の傷に細帯をして、毒を取去る爲めに其の場所へ蛇石をあてた。始め少しの間は、非常に痛みを覺えたが、段々痛みは去つて了つた。蛇石と

一一九 蛇の音楽に感ずること

稱するは、蛇に咬まれた時、其の毒を去る爲めに効能があると信じて居る圓い石である。

以上はレイン氏の實驗談であるが、蛇が果して笛の音に感じて、其の穴から出て来るとすれば、其れは如何に説明すべきであるか。此れは丁度魚類が夜中燈火を見て集まつて来るのと同じやうに、聞きなれない音がするから怪んで出て来るのであらうと思はれる。又た笛の音を聞いて踊るといふのは、不安或は驚駭を表出する自然の運動に過ぎないらしい。若し然らずんば、其ういふ運動をするやうに平素慣らしてあるに相違ない。何れにあれ、蛇に美的感情があつて、音楽に感動して踊るものとは考へられぬ。

第八編 鳥類の心理

第二十九章 記憶力

一一〇 其の發達の度

鳥類は概して記憶力の大に發達して居るものである。例へば、燕の如きは同一の雄雌が毎年同じ巢へ歸つて来る。此れに據つて、燕には少くとも一年間精確に場所を記憶して居る力のあることが分かる。又たバックランド氏は鳩が十八ヶ月間其の飼主の聲を記憶して居た實例を擧げて居る。又たツイルソン氏も鳥が其の飼主を離れてから十一ヶ月経て、猶ほ其れを記憶して居たことを其の著書のうちに載せて居る。斯の如き例は、⁴⁰枚擧に暇ないほどあるが、此れら二三の例に據つて考へても、鳥類の記憶力の大に發達して居ることは知れる。

一一〇 其の發達の度

一一一 鸚鵡の記憶—サミュエル ツイルクス氏の観察(上)

場所や飼主などに關する鳥の記憶を研究するのも面白いが、併し此れよりも一層興味のあるのは、鸚鵡の如き言語や樂譜を學び得る鳥の記憶を研究することである。此れらを研究すると、其の記憶の工合は、小兒が言語や樂譜を學ぶのと全く同一である。此れに就いては多くの學者の色々観察したものがあるが、茲に其の二三の面白い實例を擧げることとする。

一一一 鸚鵡の記憶—サミュエル ツイルクス氏の觀察(上)

英國のドクトル サミュエル ツイルクスは鸚鵡の記憶に就いて大に研究して居る人である。だから先づツイルクス氏の報告の一部分を紹介しよう。

余(ツイルクス氏)の飼つて居る鸚鵡が數年前始めて余の手に入つたときには、少しも言語を知らなかつた。だから余は鸚鵡の言語を覺える有様を觀察するには、甚

だ都合が宜かつた。鸚鵡の言語を學ぶ工合と、時に臨んで其れを話す方法とは、大に余の注意を惹いた。學ぶ工合は小兒が學課を學ぶのと大に類似し、其れを話すときの方法は、全く觀念の聯合に基づくので、吾人が談話をするときの心作用と少しも違ひがなう。

鸚鵡は最も完全に音を摸擬し得るのみならず又た聲の調子までも悉く摸擬し、猶ほ其の外に到底人間の企て及ばないほど精密に、低い音から段々高い音に上つて行くことが出來るといふことは世人の能く知つて居る所である。余の鸚鵡は、言語や句の數は澤山覚えて居たが、併し絶えず其れを喚び起す境遇があつて、常に其れを使用して居なければ、其の記憶は唯だ數ヶ月間續くのみであつた。だが假令忘れて居ても、二三回も其れを反復させると、忽ち記憶を回復するので、其れを再び覺えることは新らしい文句を學ぶのと較ぶれば餘ほど速かであつた。

始めて言語を教へるときには、屢々之れを反復せなければならぬ。其の間鸚鵡

一一一 鸚鵡の記憶—サミュエル ウイルクス氏の観察(上)

は教へる者の方へ成るべく近く耳を向けて、最も注意して其れを聞いて居る。暫らく其れを聞いて居ると、自から其の言語を發せんことを試むるのである。場合によると完全に其れを發音することが出来るのであるから、此れに據つて其の言語は何處かに保藏せられたといふことが分かる。併し始めは大抵マツク且つ滑稽である。若し一つの文句が數語から成つて居るときには、先づ始めの二三語を屢々繰返し、其れから段々他の語を附加^{つぎ}へて、遂に其の文句を完成する。發音は始めには甚だ不完全であるが、段々と完全になつて行く。斯の如くして幾時間でも、少しも倦まずに其れを復習して終に完全に其れを學ぶのである。其の有様は、余が一兒童のフランス語を學ぶのを觀察したのと全く同一である。小兒の外國語を學ぶのも、始め先づ二三語を絶えず反復し、其れに他の語を附加へて行つて遂に全體の句を覺える。而して其の發音は反復の進むと共に完全になつて行くのである。

又た余は一つのありふれた樂譜を歌つて聞かせたが、其の一音々々を精確に摸擬

し、全體で二十五の音階を悉く覺えた。

一一二 鸚鵡が物を忘れる有様—サミュエル

ウイルクス氏の觀察(下)

忘れる工合は又大に注意すべき價值がある。文句でも、樂譜でも、最後のものを一番先きに忘れて了ふ。だから忘れかけると、不完全な句を言つたり、或は半分だけ歌ふたりする。鸚鵡の記憶には、最初の言語が最も強く印象されて居る。而して此れが其の次に立つ所の言語を喚び起し、其れが又た其の次を喚び起すといふ工合に段々と一番印象の弱いものに向つて行く。併し此れは前にも言つた通り、反復に依つて忽ち回復される。其の工合は普通の心作用に於けると全く同一である。例へば、フランス語を學んだ英國人が、自分の國に居て、其れを使用する機會がないと外觀上忘れたやうになる。併し一たび海を越えてフランス語を聞かざらば、忽ち其

一一二 鸚鵡が物を忘れる有様—サミュエル ウイルクス氏の觀察

一二三 観念の聯合—ツェン氏の鸚鵡に於ける觀察

の記憶は回復して来る。又た吾人は、小兒の時に暗記した『イヤツド』とか、『エナイド』とか、或は『バラダイス、ロスト』とかの詩を、大人になつてから想ひ出して見ようとする、僅かに其の最初の二三行しか覚えて居ない。此れらを見ても、鸚鵡の場合と少しも違つたことはない。

以上二節はドクトル サミニエル ウイルクスの自から觀察して報告して居るもの、一部分を述べたのである。之れに據つて見ると、鸚鵡が其言語などを記憶する工合も、又た其れを忘るゝときの有様も、人間に行はるゝ普通の心理作用と全く同一である。

一二三 観念の聯合—ツェン氏の鸚鵡に於

ける觀察

ケンムブリツヂの有名なる論理學者ツェン氏は、鸚鵡の観念聯合の有様に就いて

甚だ面白い觀察をして居る。次に述ぶるのは即ち其の報告の一部分である。

余(ツェン氏)は三四歳になつた灰色の鸚鵡を飼つて居た。其れは西部アフリカの産であつて、まだ巢に居るうちに其の産地から或人が捕へて持つて來たのである。余は其の鸚鵡を、自分の家の表と裏と兩方の門の鈴が等しく聞える窓の下へ飼つて居いた。裏門の方の庭には、一匹の牧羊犬が居たので、其の門から人が來ると何時も激しく吠へた。ところが鸚鵡は其の眞似をするやうになつた。

そこで余は、裏門の鈴の音と犬の鳴聲とが鸚鵡の心に於て聯合することに氣が附いて、甚だ面白く感じた。其れから余はよく注意して其れを觀察した所が、犬が其處に居ないか或は何か他の事情の爲めに吠えない時でも、裏門の鈴の音がすれば、鸚鵡は必らず犬の吠える眞似をする。然るに表門の鈴の音がしても決して其の眞似をしない。

此れは知力の方から見れば極めて幼稚なことを示して居るのであるが、併し其の

一二三 観念の聯合—ツェン氏の鸚鵡に於ける觀察

一二四 鸚鵡の物を想ひ出さんとする時の有様

觀念の聯合する有様は大に注意すべきである。裏門の鈴の音と犬の吠える聲とが、鸚鵡の心に於て聯合するのは、即ち人間の心理に於て謂ふ所の觀念聯合の法則に基いて居るのである。

一二四 鸚鵡の物を想ひ出さんとする時の

有様

鸚鵡は單に物を記憶するばかりでなく、若し何か連続した記憶の一部分が消失する時には、能く其の消失せる部分を知つて、有意的に之れを想ひ出さんことを努むるものである。嘗てナビールといふ婦人が己れの飼つて居た鸚鵡に就いて、此の方面に關する面白い觀察をして居る。茲に其の一例を擧げよう。

例へば、『オールド ダン ツツカー』といふ一つの句を教へて置くと、其の始めと終りだけを能く記憶して居て、真中の語を忘れるやうなことがある。斯る場合に

於ては、鸚鵡は『オールドーオールドーオールドーオールド』と幾回も極緩くり言つて居て、其れから急に『ルシーツツカー』と言つて了ふ。併し此れは間違つて居るといふことを知つて、又た前に反り、『オールドーオールドーオールドーオールドーオールド』と幾回も靜かに繰返し、其れから切りに求めて居る『ダン』といふ語の場所へ前のは違つた語を置換へて、『ベッシー ツツカー』と言つて了ふ。然るに、鸚鵡が『オールドーオールド』と言つて居る時に、若し傍から『ダン』と言つてやると直ぐ『ツツカー』と言つて終りの語を其れに附加へる。そこで彼れが切りに想ひ出さんとして苦心して居た語の、『ダン』といふ語であつたといふことが知れる。斯の如く鸚鵡には有意的回想力がある。而して其の忘れたものを想ひ出さんと努力することの有様は、吾人に於けると少しも違つた所はない。

第三十章 鳥の感情

一二五 其の特徴

一二五 其の特徴

既に述べ来た如く、脊推動物の階級を段々上つて来て鳥になると、愛情及び同情が著るしく發達して居る。昔から鳥の雌雄間の愛情や、子に對する愛情などは、大に世人の注意を惹き、詩人や道德家が之れを以て麗はしい愛情の模範とまでした程である。此の種の感情の斯の如く著るしく發達して居るのは、鳥に於ける感情の特徴である。

英語で『ラヴ バード』(愛の鳥)と稱するものがある。此れは鸚鵡に類する小鳥であつて、其の名稱の示すが如く愛情が非常に強いので、若し雄と雌と離るゝときは、瘦せ衰へて死んで了ふといふ程である。又た牝鷄めんどりが其の雛を失つたときに激しい悲痛を感じることは、世人のよく知つて居る所である。又た駄鳥の如き痴鈍に見えて居る鳥でも、愛情の爲めに死んだり、雌を失つた爲めに雄か俄かに瘦せ衰へた

もするやうな場合がある。又た鳩類などに於いては、雌雄相思ふ情が非常に著しいので、單に其の愛情が濃やかであるのみならず、又た其の心に、己れが愛する者に對する心象の絶えず存して居るやうなことがある。此れらの事實に就いては、是れより段々述ぶる積りであるが、上に擧げた二三の例に據つても、鳥に愛情や同情の如き優美なる感情の著るしく發達して居ることは分からうと思ふ。

一二六 鴛鴦の夫婦的愛情

鴛鴦には恰かも人間に於ける夫婦の感情の如き面白い關係のあることが、ピール氏の飼鳥所に於て觀察されて居る。或夜氏の飼鳥所へ泥棒が這入つて、一番ひの鴛鴦て其の雄おとこが盗み取られ、雌メスのみ残されたものがあつた。ところが雌は雄を失つた爲めに非常に悲しい容子を表はし、食ふことも飲むことも全くしなかつた。

其の時丁度同じ飼鳥所の内に、雌のなくなつた一羽の鴛鴦があつて、此の悲んで

三三六 鷺の夫婦の愛情

居る雌の傍へ来て、頻りに媚を呈した。併し雌は少しも其れに感應しなかつた。暫らくすると、盗まれた雄は飼主の手に戻つて、再び飼鳥所へ入れられて、雌雄もとの如く一所になることが出来た。そこで久しく憂鬱になつて居た雌は忽ち活き反り、其の時の兩方の喜びといふものは何とも形容の出来ないほどであつた。然るに唯だ喜んだのみでなく猶ほ面白いことがあつた。其れは歸つて来た雄の、其の不在中に雌に媚を呈した雄に對する激しい嫉妬心であつた。前者は後者の己れが不在中にしたことを其の雌から教はつたかの如くに、激しく後者を攻撃し、其の眼を突き破り、死に至らしむるほど澤山の傷を台はせた。斯の如き動作は人間に於て見ると少しも違つたことはない。歸つて来た雄は、何かの合圖に依つて己れが不在中の事を雌から聞いたのか、或は嫌疑を起したのか、或は唯だ本能的に嫉妬の情を起したのか、其れは固より分らない。併し其の動作が嫉妬の情を表出することだけは明かなる所である。

一二七 鴿の貞操

鴿即ちハクテウには人間社會に於て貞操と稱するものと同様の感情がある。エッセ氏は此れに就て次の如き觀察をして居る。一番のハクテウが三年の間絶えず一所に居て、其の間に三たび卵を産み、雛を育てた。然るに三年目の秋、雄の方が殺されたが、其の時から雌は非常に陰鬱になり、全く自分の仲間を離れて孤立して居た。エッセ氏が此の報告を書いたのは、其の翌年の三月なので、丁度ハクテウの交尾期の過ぐる頃であつたが、矢張り以前と少しも變らずに自分獨り離れて陰鬱の状態に居た。交尾期になつた爲めに其の仲間の雄は切りに近いて来たが、一々これを拒絶して、其れを追ひやるか、或は自から逃げて居たといふことである。エッセ氏は、斯の如き寡婦の状態が何れだけ續くか余は知らないが、併し此の雌が以前の配偶者を決して忘れずに居ることは確かであ

一二八 鶏の子に對する愛情
ると言つて居る。

一二八 鶏の子に對する愛情

鳥類は一般に子に對する愛情の著るしく發達して居る動物であるが、其のうちでも雞は特に此の本能が強い。自から子を産まない牝雞に於てすら猶ほ此の本能の現はれることがある。此れに就いて、博物學者ニイチ氏が一つの面白い實例を擧げて居る。斯る例は決して珍らしくはない、併し子に對する本能或は感情が如何に根強いかといふことを示すに適當な事實であるから茲に擧げて置く。

庭園の片隅に牝雞の巢が造つてあつて、其處で牝雞が自分の卵を温めて居た。然るに其の牝雞は飢に迫つて食物を得る爲めに暫らく外へ出て行つた。其の時同じ庭園に倭雞ウヰキの雌メが一羽飼つてあつたが、前の牝雞の卵を棄て、行つたのを見て、其の巢へ這入つて自から之れを温めて居た。そこへ前の牝雞が歸つて來たので、此の有様

を見て大に驚き且つ怒つた容子であつた。頭をたて眼を怒らして倭雞を追ひ除けんとしたが、併し倭雞は卵の上に固く坐つて居て何うしても動かなかつたので、遂に本統の母たる牝雞は其れを斷念して、全く倭雞に譲つて了つた。

倭雞は其の巢にある卵を全體温めるに身軀の小さい爲めに、其の卵を悉く孵化させることは出来なかつたが、併し其の多數は満足に孵化して雞となつた。そこで倭雞は其の活潑な雞を引き伴れ、之れを自分の兒として大に喜んで誇りげに歩いて居たといふことである。

此の倭雞は特に身軀の小さかつたので、未だ曾て卵を産んだ經驗もなく、又た産むことが出来なかつたのである。然るに其の子を得んとし、又た之れを得て喜ぶところの感情は斯の如くである。此れに據つて彼れらが子に對する本能或は愛情の如何に強いかといふことが知れる。

一二九 鵞の同情

英國の某婦人が鵞の同情に就いて面白い観察をして、其れを動物心理の研究家マニース氏に報告して居る。其の婦人の家に澤山鵞が飼つてあつて、そこへ新たに一羽のハクテウが加はつた。ところがハクテウは鵞の仲間から何時も排斥されて居たので、唯だ人間をのみ頼みにして、恰かも其の同情を求むるやうな容子であつた。

然るに後に至つて鵞の中に一羽の友達が出来て、大に其れと親しむやうになつたが不幸にして其の鵞が明を失つた。而して仲間の鵞は少しも之れに構はなくなつたのでハクテウは大に同情を寄せて一層親切に之れを保護するに至つた。其の動作は實に感心すべきもので人間も及ばぬ程であつた。盲目の鵞に游泳が必要であると思ふときには、ハクテウは靜かに其の旁をとり、遠くの水際まで伴れて行つて泳がせ

た。又た鵞の泳ぐときには、ハクテウは何時も其の傍について自分も泳いで、危険の場所へ行かないやうに之れを導いた。而して充分泳いだ時分には、上陸するに便利な場所へ伴れて来て、之れを導いて上陸させた。此れらの動作を観察することは其の裏面に純然たる同情の存することは明かである。

一三〇 群鳥と同情

鳥類のうちには、澤山群をなして生存して居るものがあるが、此の種の鳥には互に同情を寄せることが特に強いやうに見える。例へば、其のうちの一羽が殺されるか、或は捕へられるかすると、其れを悲しむことは非常に強いのである。此れ此の種の鳥の特質であつて、其の同僚に對する同情の強いといふことが證せられる。

エッセ氏はミヤマ鳥に就いて自ら觀察した一つの實例を擧げて居る。或時氏の傭人が麥島カハシの案山子カハシにするために、一羽のミヤマ鳥を銃殺した。ところが其鳥の未

一三一 鷗の友情

だ死にさらない内に、同じ群の一羽が其の上を飛び廻つて、遂に其を持つて居る人に觸れるやうに突進して來た。想ふに此れは其の不幸なる友を救ひ出さんとの最後の望みを以てしたものに相違ない。其れから傭人は其の銃殺した鳥を鳥へ吊したが、其の後も猶ほ二三羽の鳥が悲しうに其の近傍を飛び廻はつて居た。而して自分の友が既に殺されて了つて全く望みのないことを發見するに至つて、彼等は始めて其鳥を去つたといふことである。

一三二 鷗の友情

博物學者エドワード氏は、鷗の友情の厚いことに就て面白い事實を擧げて居る。氏は或る時一匹の鷗を打ち落した所が、其の鷗は傷を受けたのみで未だ死なずに海の上に浮んで居た。風の爲めに段々水際へ寄つて來たから、氏は其れを捕へんとし、て近づいたが、其の仲間の友情に厚いことに感じて、遂に其れを捕へるに忍びなかつたと言つて其の時の有様を次の如く書いて居る。

つたと言つて其の時の有様を次の如く書いて居る。

一三一 鷗の友情

傷を受けない二羽の鷗が來て、其の倒れて居る友の各々一方の翼を取つて水から引き上げ兩側から之れを支へて海の方へ飛んで行つた。又た別に二羽の鷗が其の後へ附いて居た。六セヤード位も飛び行くと、靜かに水面に下ろし、他の二羽の鷗が代つて前の通りに其れを擔いで又た暫らく飛んで行つた。斯の如く二羽づゝ互ひに代つて之れを擔いで、遂に遙か向ふの岩の上へ持つて行つて其處へ落着いたのである。そこでエドワード氏は自分か一たび射落したものを奪ひ去られたことを、如何にも残念に思ふて、其れを取戻さんとして出かけて行つた。ところが鷗は忽ち其れを知つて、少しの間に全群の鷗が此の周圍へ集つて來た。而して氏が其の岩へ近づくと、くや否や、又た二羽の鷗が前の如くに其れを擔いで、とても氏の達し得ざる程遠方へ飛び去つたので、氏は之れを見て大に感じたのである。而して氏は言つて居る。「余は若し強いて之れを捕へんとすれば捕へることが出來たに相違ない、併し此の

一三三 鸚鵡の同情

有様を見ては、余の感情は決して之れを許さなかつたので、余は却つて彼れらが慈愛の働きを完成せしめ、人間の模範たるが如き友情の實例を現はさしめんとして、彼れらの爲すまことに任せたりである。

一三二 鸚鵡の同情

鸚鵡は互ひに同情を表することの厚い鳥であるが、人間に向つても常に親しんで居るものには同情を表することがある。ロマネーヌ氏は、嘗てバツフォンといふ人の家に飼つて居た鸚鵡のことに就いて此れに關する一つの實例を擧げて居る。

其の鸚鵡は一人の下婢によく懐いて居たのであるが、或時その下婢は指に腫物が出来て惱んで居た。ところが其の鸚鵡は、此の下婢の苦痛に同情を表し、決して其の病室を離るゝことなく、恰かも自分に苦痛のあるが如き容子をして常に嘆いて居た。然るに其の下婢が全快するや否や、鸚鵡は忽ち快活になつて、大に喜ばしそ

な容子を示したといふことである。

一三三 鳥の嫉妬心

鳥類は概して嫉む情の強いもので、西洋に於ては昔から此れが諺になつて居る程である。従つて競争の念も亦た甚だ強い。此れは鳥の互ひに競ふて啼くことに依つて分かる。ポールド氏は此れに就いて面白い一例を擧げて居る。鏡の前へカナリヤを置くと、鏡に映じた自分の影と競争して啼き出し、自分が啼けば其の影も亦た嘴を動かして啼く如く見ゆるから、益々激して遂に怒りの餘り其の影の方へ飛び出すといふことである。

此れは鏡に映じた自分の影を他の鳥と思ふて、其れと競争した場合であるが、一方の鳥と他の鳥との間に斯る競争の起る實例は澤山ある。此の競争の起るのは、彼等に嫉妬心が強くして、互に負けることを嫌ふ爲めであらうと或學者は言つて居

一三三 鳥の嫉妬心

一三四 鸚鵡の復讐心

鳥類のうちには大に復讐心の發達して居るものがある。鸚鵡の如きは即ち其の一例であらふと思ふ。ロマニース氏は猫と鸚鵡との喧嘩に就いて左の如き一事實を擧げて居る。

或日猫と鸚鵡とが喧嘩をした。此れは恐らく猫が鸚鵡の食物を顛覆したか何か其んな事であつたらしい。併し間もなく再び仲がよくなつた様に見えて居た。然るに一時間ばかりたつと、鸚鵡は食卓の端へ立つて、非常に可愛がるやうな調子で猫を呼んだ。そこで猫は其の傍へ行つて、何氣なく極めて無邪氣に眺めて居た。その傍に牛乳を入れた器が置いてあつたが、鸚鵡は嘴で其れを啣へて、猫の上へヒツクリカヤシて了つた。無論器は破はれ、猫は全く牛乳をかぶせられた。そこで鸚鵡は意地の悪

い容子をして、猫を罵つて居たといふことである。

一三五 鳥の好奇心

鳥類は概して好奇心が大に發達して居る。此れは、鳥を捕へることを職業にして居る人のよく知つて居る所であつて、彼等は之れを利用して鳥を捕へることが多い。例へば、何か鳥の見慣れない物を置くと、鳥は其れを檢する爲めに近づいて来て、遂に罠に陥るやうなことがある。是れ全く好奇心に驅らるゝ爲めである。

又た人の居ない大洋中の島へ始めて人間が行くと、鳥は奇妙なものが來たと思ふて之れを檢する爲めに、少しも恐れず人に近づいて来る。之れ無人島へ行つた人の經驗して居る所であるが、斯の如きも亦た鳥に好奇心の強いことを證するものである。

一三六 鳥の美的感情

鳥に美的感情の存することは、種々の事實に徴して疑ひのない所である。先づ其の一點を挙げれば、鳥の種類によつては巢を甚だ美麗に裝飾することである。例へば、蜂鳥(humming-bird)と稱する極めて小さい奇麗な鳥があるが、此の鳥は美しい地衣や色の違つた羽根を以て巢の外部を甚だ美麗に裝飾する。其の觀美心といふものは、非常に發達して居るやうに思はる。

又ダーウインが雌雄陶汰のことに關して論じて居る如く、雄鳥には美麗なる羽根があるので、雌鳥は之れを見て快樂を感ずるのである。其の美しい羽根のあるのは、雌雄陶汰の結果として起つて來たので、雄鳥が特に之れを裝ふ譯ではないが、併し雌が之れに感ずる以上は、兎に角美に對する感情の發達して居ることゝは明かである。

又た雄鳥は大抵一種の聲を出して歌ふので、自然の音樂を持つて居ると謂つても宜い。此れまた雌雄陶汰の結果として發達して來たものであつて、雄鳥が雌鳥を引きつける爲めである。然るに此れも亦た鳥に美的感情の存する一つの證據となる。其の歌ふ聲によつて快樂を感ずる以上は、美的感情のあるとは疑ひのない所である。固より鳥の種類によつては、吾人が聞いて其の聲の必らずしも美なるものばかりではない。併し此れは鳥の種類によつて其の美的標準の違ふことを示すに止まるので、鳥に美的感情のあることには何んらの關係をも持つて居ない。吾人が聞いて美でないものでも、同種類の鳥には麗しく感ぜらるゝに相違なからうと思ふ。

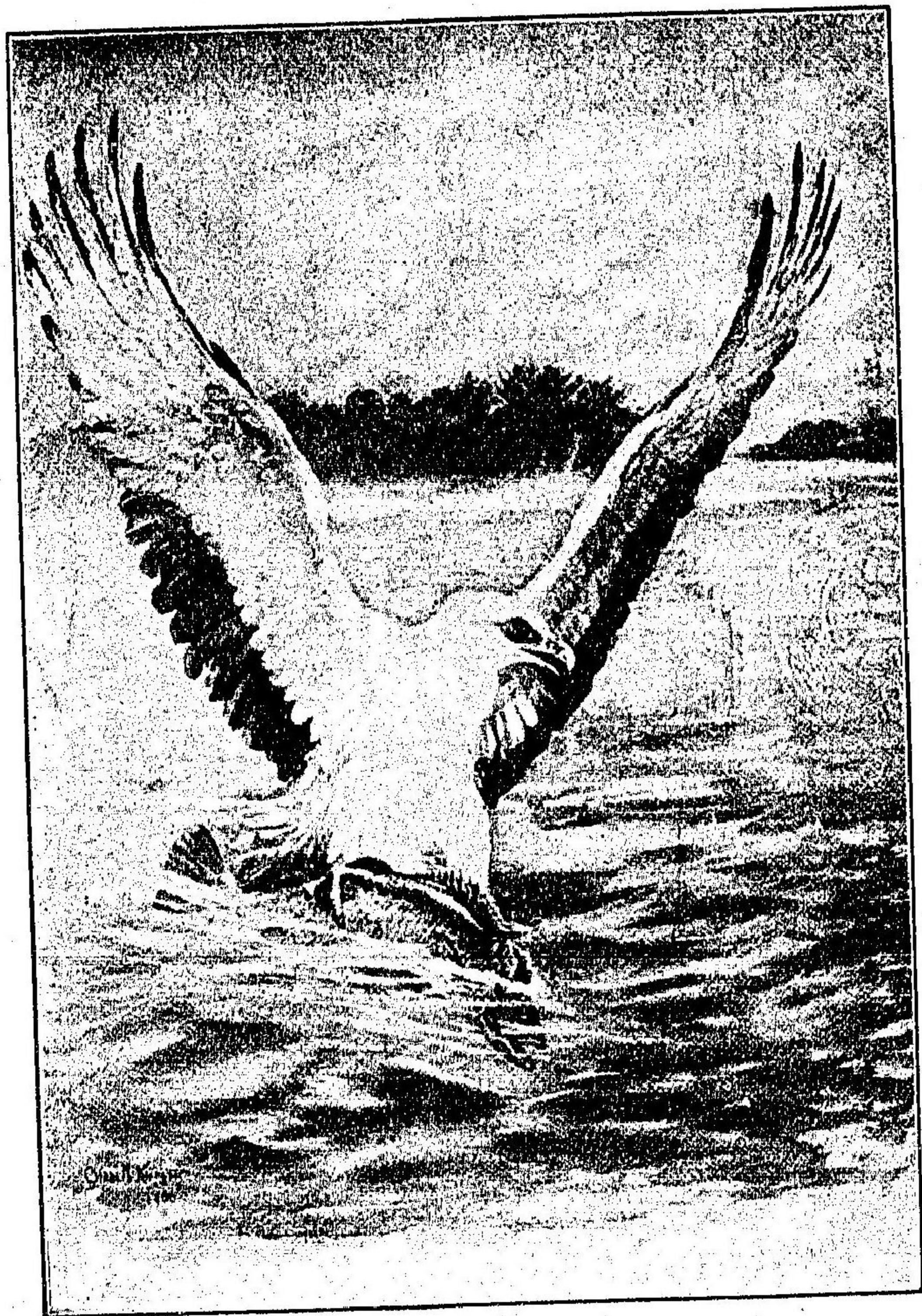
又鳥には單に彼れら自身が發する聲によつて愉快を感ずるのみならず人間の音樂を聞くことを好むものがある。例へば、鸚鵡の如きは、ピアノの音や、女子の歌ふ聲を聞いて確かに愉快を感ずるやうに見ゆる。又たジョン・ロックマンといふ音樂家は鳥が特に或曲を聞き別ける力を具へて居るとに就て、面白い事實を示して居る。

氏が嘗てリーといふ人の家に滞在して居たときに、其の家の娘が音楽をやつて居たが、「アドメタス」のハンデルのオペラの中の「メペリ、シ」を奏する時には、何時も一羽の鳩が其の附近の巢から、其の室の窓へ下りて来て、最も愉快な感情を表はして其れを聞いて居た。而して其の曲が終ると忽ち巢へ歸つて行つた。然るに其の他の曲を奏するときには、決して斯ういふことはなく、鳩を引き着けたのは唯だ此の一つの曲のみであつたと言つて居る。

第三十一章 鳥の知力

一三七 鳥と鏡及び繪畫

鳥類は大抵鏡に映せる己れの影像を見て、實際の鳥と認むるのである。此れは前章第一二三節に於ても、カナリヤのことに關して一言した所であるが、猶ほ多くの人の實驗した其れと同様の事實が澤山ある。ホーソーといふ人は鸚鵡に就いて同一の



鷗の一種 - 魚を捕へるために全力をこら上飛す

實驗を施し、而して鳥と犬とを比較して鳥は鏡の形像で欺かれ易いが、犬は鳥よりも欺くに困難である。此れは犬に於ては嗅感に依頼することが多いからであると言つて居る。

併し此れは必ずしも嗅感に依頼することの多少に由るのではなく、重もに以前の經驗の有無に由るものゝやうに思はれる。犬といへども未だ年齢の若い奴か、或は未だ鏡を見た經驗のない奴であると、假令何んな鋭敏な鼻を持つて居ても、鏡の影像を以て之れを欺くは容易である。ロマニースは、非常に鋭敏なる嗅感を具へて居る獵犬に就てこれを實驗したが、屢々經驗を積ねて、其の影像の實物でないことを知るまでは、實際の犬と信じて之れと戰つたと言つて居る。

鳥に於ても亦た之れと同様である。ロマニース氏はカナリヤに就てまた之を實驗して居るが、其の實驗に據ると、カナリヤは鏡に映つた己れの影像を見て他の鳥と思ひ、又た部屋の反射して居るのを見て他の部屋があると信ずる。だから其の部屋

一三八 鳥の想像力

へ飛び行かんとして、鏡面へ衝き當つて落ちたことがある。併し一たび斯る経験をすると、二回目には決して同一のことを反復しない。されば鳥が鏡の映像を見て實物と想ふのは以前の経験がない爲めであるやうに思はれる。

然らば繪畫に對しては何うであるかといふに、此の場合に於ても鏡の映像に對するときは同様であるらしい、フランクランドといふ人は自から飼養して居た鸚鵡(雀科に屬する小鳥)の一種に就て之れを観察して居る。此の人の部屋に同じ鳥の雌を自然大に描いた水彩畫があつたが、鶯は此の水彩畫を見て全く生きて居る雌と思ふて居たといふことである。

一三八 鳥の想像力

鳥類は大に發達した想像力を具へて居る。此れは、前章に述べた如く鳥が己れの友の居なくなつた爲めに悲しむ事實に據つて分かり、又た鸚鵡などが現在居ない友

を呼ぶことに據つても知れる。斯の如きことの出来るのは、彼等に想像力があつて現に居ないものに對する心象を描くことが出来る爲めである。

又た鳥類は夢を見ることがある。此れはキユヰイエル、ゼルドン、トムソン、ベソネット、ホーゾー、ベヘスタイン、リンドセー、ダーウイン等の大家の既に説明した事であつて、少しも疑ひのない所である。此れまた鳥類に想像力の發達して居ることを證するものである。想像力が發達して居なければ、夢を見る筈はない。

一三九 鳥の教育

鳥類は殆ど一般に幾らか教育することの出来る性質を具へて居るものであるが、種類によつては、此の性質の著るしく發達して居るものがある。此れは鳥を扱ふ所の見世物師などが、種々の鳥を教育して巧みに藝をやらせることに據つても知れる。

ビングレー氏は此れに就て一つの事實を擧げて居る。或時有名な見世物師が、金

一三九 鳥の教育

鶯、花鷄、カナリヤ等の小鳥に巧みに藝をさせたが、其のうちで最も巧みであったのは一羽の小鳥が死んだ真似をしたことである。其の鳥は全く死んだ通りに倒れて居て、尾や足を以て吊し上げられても、少しも生きて居る容子を現はさなかつた。又た一羽の鳥は頭で立つて、兩足を高く舉げた。その他斯の如き巧みな藝を色々つたといふことである。

又た鳥が自分の経験に依つて新らしい知識を得ることに就て、多くの學者の觀察して居る甚だ面白い事實がある。始めて電線を引いた土地に於ては、ムク鳥や、雀のやうな群をなして飛ぶ鳥は、電線に觸れて死ぬことが屢々ある。此れは電線の何たるかを未だ経験したことがないからである。然るに一たび斯る経験をすると、其の群は決して再び電線の近くを飛ぶことはない。大に之れを恐れて避けるらしく思はれる。之れ全く経験に依つて其の恐るべきことを知るのであつて、其の教育され得べき性質を有することは之れに徴しても分かる。

一四〇 鶯の知力―鶯に外科手術を施せる實驗

メノールといふ人が、鶯の外科手術を受けたことに就て、次の如き事實を擧げて居る。或時フランスで、一羽の狗鶯が、狐を取る爲めの罾にかゝつて捕へられた。其の鶯は罾の爲に足が裂けて了つたので、パリーの動物園へ連れて來て、其れに外科手術を施した。然るに其の手術中の有様は、此の鳥に充分理性の具はつて居ると及び其の理性に従つて非常な疼痛を耐忍し得る力のあることを示したのである。手術中頭は自由にしてあつたが、併し手術者に抵抗するやうなことは少しもないのみならず、其の傷口から骨の断片を取除くやうな痛いことをされる時にも、決して其れを妨ぐることはなく、又た其の傷口に繃帯を巻くときにも少しも騒がなかつた。其の容子は、斯ることをされる目的を充分理解し、又た其の結果をよく知つて居るものゝ如くに見えて居たといふことである。

一四一 鳩の才智

ナビールといふ人が鳩の才智に就て面白い事實を観察して居る。或處にバターと稱する鳩が澤山飼つてあつて、何時も馬の食ひコボした僅かの大麥を拾つて食つて居たところが彼れらは甚だ面白い工夫をして、馬に成るべく澤山麥をコボさせる様にした。其の方法は、馬が麥を食ひかけると、大きな鳩が一羽飛んで来て、馬の目の前で激しく羽打ちをして馬に頸を振らせるのである。さうすると、麥は必らず澤山コボれる。ナビール氏は屢々之れを目撃したのであるが、人から貰つた食物の盡きた時には、鳩は何時も此の方法を行つたと言つて居る。

一四二 燕の發明

燕の發明に就て、チャールズ ウイルソンといふ人は次の如き事實をロマニース

氏に報告して居る。嘗てサイクトリアに於て、一番ひの燕が或家の軒下に巢を作つた。然るに其の巢の一部分が呼鈴の針金の通つて居る上になつて居たので、其れが爲めに巢は二回も落された。そこで燕は面白い工夫をして新たに巢を造つて、針金の部分へはトンネルを拵へて其れに依つて針金の自由に動くやうにしたのである。それで今度は其の針金が何んなに引つ張られても、其れが爲めに巢は少しも破損を蒙らぬやうになつた。

又た別の人が之れと畧ぼ類似の事實を報告して居る。或時一番ひの燕が檐下に巢を造つた所が、雀が其れを奪はんとして其の穴へ這入つて来て困つた。そこで彼等は工夫をして、其の入口の穴を廢して之れをトンネルの形に變じて了ふた。其れが爲めに、雀は再び巢に侵入することはなくなつた。

燕が巢を造るのは無論本能であるが、併し斯の如き發明をするのは、決して本能とは謂へない。斯る工夫をするには、彼れらの知力が大に發達して居なければなら

一四三 燕の理性及び通信力
ないのである。

一四三 燕の理性及び通信力

燕に理性及び通信力の存することに就て、エッセ氏は次の如き事實を擧げて居る。ダブリンの或空家に一番の燕が巢を造つた。然るに一羽の雀が来て忽ち其れを占領したので、燕は取り戻さんとして大に雀と戦つたが、遂に負けて了つて。其れから燕は其の巢を捨て、何處へか飛んで行つたが、暫らくすると澤山の仲間を伴れて再び歸つて来た。然るに其の澤山の燕は各々口に一塊の粘土を啣へて居たので、其の粘土で巢の入口を突然密閉して了つた。ところが雀は巢を奪はれないやうに其の中に這入つて居たので、其れが爲めに全く閉ぢ込められたのである。其の後暫らく経て其の巢を取つて多くの人が見たのであるが、其の内に雀の死體が依然として残つて居たといふことである。

此の事實に據つて見ると、燕に推理力のあることは確かである。其れのみならず、一種の通信作用があつて、己れの意志を仲間のものに通ずることが出来るに相違ない。若し理性と通信力がなければ決して斯る復讐の出来やう等はないとエッセ氏も言つて居る。

一四四 鳥の智力

テンネット氏はセーロン島の博物に關する著書のうちに、鳥の知力に就て次の事實を擧げて居る。或時、鎖に繋がれた犬が惰けた容子をして魚の骨を嚙んで居た。ところが一羽の鳥が其の前へ来て、跳り廻つて、犬が注意を他に向けたら其れを奪はんとして切りに狙つて居た。然るに其の企ては成功しなかつたので、遂に他へ飛んで行つたが、暫らくすると、一羽の友を伴れて歸つて来た。而して其の加勢に來た鳥は、非常な速力を以て飛び下り、其の鋭い嘴に力を込めて突然犬の背中に打ち

一四四 鳥の知力

たてた。犬は驚いて振り反り、其の鳥を捕へんとしたが間に合はなかつた。而して其の間に他の鳥は、犬の持つて居た骨を機敏に奪つて飛んで行つた。其のやり方は人間も及ばぬほど巧みなものであつた。

此の外にも猶ほ之れに類する實例は澤山あるが、此れらの事實に據つて考へると鳥の知力の進んで居ることは、實に驚くべきものである。彼れらに複雑なる思想作用のあることは疑ひがない。自分の力で及ばない場合に他の加勢を求めたり、犬を狼狽させて置いて其の間に食物を奪ひ去つたりするやうな働きは、餘ほど發達した思想作用がなければ到底出来ない所である。

第九編 有袋類、游水類、反芻類、翼手類、食肉

類等の心理

第三十二章 有袋類の心理的觀察

一四五 有袋類の特質

有袋類(Marsupialia)は哺乳動物中で最も下等に位するものであるから、其の心作用に於ても亦た哺乳動物のうちでは一番劣つて居る。此れから諸種の哺乳動物の心理的現象を説く積りであるが、先づ其の最も下等なる有袋類から始めて行かう。

有袋類の標本として擧ぐべきものは、濠州及び新幾内亞の原野に産するカンガロである。此れは有袋類中で最もよく世人に知られて居るものである。此の外にも袋鼠、ウランバット等があるが、凡て有袋類の胎兒には胎盤がない。だから胎兒は臍

一四六、カンガロの子に對する愛情

内に於て榮養を受くることが出来ないの、極めて微弱な状態に於て生れる。其の代りに、牝には必ず腹部に兒を入れて發育させる爲めの皮囊がある。而して兒は生れるや否や、此の皮囊の中へ這入り、乳房を口に含んで成長するのである。此れ此の動物の特質であつて、有袋類といふ名稱も全く此れから出た譯である。

一四六 カンガロの子に對する愛情

有袋類の心理現象に就ては、餘り觀察したものがないが、其の子に對する愛情に關してエッセ氏の擧げて居る唯だ一つの事實がある。此の動物には前に述べた通り、兒を保育する特別の構造がある如く、心理上に於ても兒に對しては一種の特質があるので、其の愛情及び保護の知力が大に發達して居るやうに思はれる。之れは下に述ぶるエッセ氏の擧げて居る事實に據つて明かである。

カンガロは、其の皮囊に兒を入れて居るときには、己れの生命が如何なる危険に

陥つても、之れを保護せんことに努むる。例へば、犬に追詰めらるゝやうな場合には跳んで遁げるに、必ず其の前脚を囊に於て、之れを保護して居る。而して到底叶はない時になると、其の兒を囊から取り出して、犬の居ない方へ力かぎり投げ出して了ふ。併し之れが爲めに大抵は母子ともに生命を失ふのであるが、幸ひに助かつたときには、忽ち其の兒を探るのである。

此れは或人が自から目撃して、之れをエッセ氏に報告して居る事實であるが、斯ることはカンガロ狩りをする人の常に見る所である。斯の如き事實に據つて考へると、カンガロが其の子に對して愛情の厚いことや、又た之れを保護する爲めに、思慮決断を現はすことは明かである。

第三十三章 游水類の心理的觀察

一四七 海豚の知力

一四七 海豚の知力

一四七 海豚の知力

游水類 (Cetacea) と稱するは、海洋中に棲んで居る魚形の哺乳動物であつて、イルカ、ゴトウクジラ、セミクジラ等の類を總稱するのである。此れらの動物の知力作用を観察するのは甚だ困難であるから、未だ精密な研究をしたものはないが、併し幾らか観察された事實に據つて見ると、其の知力は可なり進んで居るらしく思はれる。

イルカの記憶に就て、フォックス氏は下の如き事實を擧げて居る。或時フアルマウス港の近海で網を以て海豚を圍んだことがあつた。海豚の群は之れに驚いて散亂し、二頭だけ捕へられた。以前は此の附近に屢々海豚が来て居たにも拘はらず、一たび此の騒ぎがあつてから二年間以上は、全く来なくなつて了つた。此れ彼れらは網で圍まれたことを記憶して居たものに相違ないとフォックス氏は言つて居る。

又たケントといふ人は、海豚の知力に就いて面白い一事實を擧げて居る。海豚を飼つて居る人は、其れに食物を與へるときに、口笛を吹いて呼び寄せる習慣をつけ

て居る。然るに、口笛は聞かないでも、其の人の足音を聞くだけで、海豚は喜んで騒ぐことがある。此れは其の人が来れば食物が貰へるといふことを經驗に依つて學んだのである。又たケント氏の擧げて居る他の事實に據ると、海豚には好奇心や、遊戯心などもあるやうに思はれる。

一四八 鯨の子に對する愛情

鯨も見に對する愛情は非常に強いので、此れが爲めに牝は己れの生命を亡ぼすことが屢々である。だから捕鯨者は之れを利用して巧みに鯨を捕へることがある。此れに就てスコルスピーといふ人も自から觀察した一つの事實を擧げて居るが、其の方法は見を伴れて居る鯨が居ると先づ其の見に銚を投ずるのである。見が捕へられると、母鯨は全く狂氣の如くなつて騒ぎ廻はり、其れを取戻さんとして船に近づいて来る。而して如何なる危険が自分の身に及んでも毫も其れに注意することはない。

一四八 鯨の子に對する愛情

一四九 馬の知力の程度

此の機に乗じて漁夫は銛を投ずるのである。鯨類が見に對する愛情の如何に強いかといふことは、此れに據つて明かである。

第二十四章 馬及び驢の心理

一四九 馬の知力の程度

馬は世人の知つてゐる通り、随分伶俐な動物である。併し其の知力の度は之れを食肉類と比較すると、其の何れにも劣つて居る。又た植物を食ふ四足獸のうちでは、遙かに象の下に立ち、且つ其の同類たる驢にも幾分か劣つて居る。然らば其の知力の程度は何の邊にあるかといふに、反芻類即ち駱駝、牛、山羊等の如きものより僅かに一二等位上に立つて居るらしく見ゆる。之れ下に追々述ぶる所によつて自づから明かになるだらうと思ふ。

一五〇 馬の感情上の特質

馬は非常に恐怖の情の強い動物である。一たび恐怖の情の起るときには、一切の心作用は悉く之れが爲めに亂されて丁つて、恰かも狂氣の如くなるのである。平素の習慣が忽ち一變し、知力作用の釣合つひあひがなくなるのみならず、又た感覺までも混亂されるやうな傾きがある。此れは常に馬を扱つて居る人のよく知る所であらうと思ふ。要するに、馬の一切の心作用は、恐怖といふ唯だ一つの感情の爲めに支配されて居ると謂つても宜い。何故斯んなに恐怖の情が強いのか其れは分らないが、兎に角此れは他の動物に見ざる所の感情上の特質である。

一五一 馬の感情の種類

馬には恐怖の情の外に、猶ほ種々の感情の現はるゝことは明かである。その二三

一五〇 馬の感情上の特質

一五二 馬の記憶

の著るしい例を擧げんに、第一、馬には愛情があつて、其の主人を愛し、又た自分が愛せられることを大に喜ぶのである。又た馬には嫉妬の情があるので、他の馬が人に愛されて居るのを見ると、大に嫉む傾きがある。又た高慢の情もあり、遊戯の情もある。馬が集つて楽しさうに駆け廻つて居る時の有様を見れば、其の遊戯の情のあることは分かる。又た高慢の情の如きも、ロマニース氏などの説によると、著るしく現はれるといふことである。此れらの外にも、猶ほ種々の感情があるやうに思はれるが、併し馬の感情に就ては、未だ精密に観察したものがないから、茲に述ぶることは出来なす。

一五二 馬の記憶

馬は極めて記憶の善い動物であるやうに思はれる。而して其の記憶は長い間續くのである。例へば、唯だ一回通つたばかりの道でも久しい間之れを記憶して居るこ

とがある。此れは常に馬に乗る人の屢々経験して居る所である。

馬の記憶の繼續に就て、ウニツワードといふ人が自から経験した所をターウインに報告して居るものがある。其れに據ると八年以前に唯だ一回通つただけの道をよく記憶して居たといふことである。斯る場合は無論一般の事と見る譯には行かないが、併し馬が概して記憶の善いことは疑ひのない所である。

一五三 馬の知力

馬は己れの経験から學んで新らしい動作をする場合が随分ある。ロマニース氏は自分の馬に就て自から観察した事實を擧げて居る。其の馬は極めて伶俐な方であつて御者が眠つて居ることを知るときには、自分の繫がれて居る綱を巧みに脱けたり、空腹になつて來ると、麥の入れてある處の戸をハズシたり、又た咽が渴くと水桶を顛覆して水を飲んだりするやうな事が屢々あつたさうである。此の斯きは皆

一五四 数の觀念

平素人のするのを見て學んだものである。

又たストリックランドといふ人が一つの面白い事實を擧げて居る。或處に片眼の牝馬があつて、十二歳の時に始めて見を産んだ。ところが眼の見えない方の側に其の見が居るときには、屢々之れを踏み附けたり、蹴つたりしたので、之れが爲めに其の見は生後三四ヶ月にして死んで了つた。然るに其の翌年また二番目の見を産んだが、其の時には何うであつたかといふと、常に注意して自分が動くには先づ見の居る處を見て置いてから動き、見を踏んだり、傷けたりするやうなことは一回もなかつたのである。之れ即ち前に見を踏み殺した記憶があつて、其れから考へて斯る注意をなすに至つたものである。其の記憶あり、想像あり、推理作用のあることに至つては、人間と少しも違ふ所はない。

一五四 数の觀念

馬と驢との雜種兒を英語でミニールと稱するが、ホーナー氏はミニールに五まで數へる力があるといふ證據を擧げて居る。ニエーオルレアンスの鐵道馬車にミニールを使用して居て、五回づつ通ふと休ませることになつて居た。ところが其の馬車のミニールは、四回までは決して休息を豫期する容子を表はさないが、五回目の終りになると喜ばしうに嘶いて、此れから休めるといふやうな容子を示したといふことである。そこでホーナー氏は、此の事實はミニールが五まで數へ得ることを證明すると言つて居る。

馬に數の觀念のあることは、或は事實であるかも知れない。併し上述の觀察が、果してミニールの五まで數へ得ることを證するか何うか其れは少しく疑はしい。五回目の終りになつてミニールが「モウ休める」といふやうな容子を表はすのは、何か彼等に休息の合圖となつて居るもの(例へば、馬丁が出て待ち受けて居る如き)があつて其れで知つたのではないとも謂へない。

一五五 バイソンの才智

第三十五章 反芻類の心理

一五五 バイソンの才智

牛の一種で北米の原野、殊にロッキーマウンテン附近に群棲するバイソン (Bison) と稱するものがある。此の動物が狼の侵襲を受けるときに、其れを防禦する方法は甚だ面白い。狼の群が近いて来るとバイソンは香に依つて之れを知るのであるが、之れが分かるや否や、バイソンの群は環の形に並んで了ふ。而して一番弱いものを其の中心に入れ、一番強いものが外部に立ち、各々角を外方に向けて、敵が侵入する餘地のないやうにするのである。

一五六 山羊の知力

ウエーグフィールドといふ人が、山羊の知力に就て同種類の二つの事實を擧げて居

る。其の二つともに、二匹の山羊が突然岩の絶頂に於て出會ひ、其の兩側は恐ろしい断崖であり、又た其の絶頂は狭くして互に行き違ふことは出来ず、如何とも仕方のないといふ場合である。而して其の一つはブリマウス シタデルの壘壁に於て起つたことで多くの人が之れを目證し、他の一つはアイルランドのアルデングラスに於て起つたことである。

此れらの場合に於て、山羊は何うしたかといふに、彼れらは恰かも己れの位地を考へて、如何にするが良策であるかを思慮して居るが如くに、暫らく互に眺め合つて居た。然るに二つの場合とも同様に、一匹の山羊が非常に注意しながら岩の絶頂に眺づき、而して出来るだけ岩に接して平伏した。そこで他の山羊は其の背中の上を歩いて通り過ぎて行つたのである。此れは山羊の考へとしては實に妙策と謂はざるを得ない。斯の如き事實に據つて考へると、山羊の知力が大に發達して居るといふことが分かる。

一五六 山羊の知力

一五七 牛の知力

斯る話は一見信じられないやうに思ふ人があるかも知れないが、併し此れらの獸類は山野に棲んで居るときには、屢々斯る境遇に出會ふのであるから、其れを考へれば、經驗上此の位の智慧の出来るのは、決して信じられないことでもなからうと思ふ。

一五七 牛の知力

フオルスターといふ人が、牛の知力に就て、オーストラリアに於て自から經驗した一つの事實を報告して居る。或時氏は作物を保護する爲めに一つの島に圍ひを造つて大切にして居た。然るに氏の家に飼つてあつた一匹の牡牛が、何處から這入るか何時も其の圍ひの内に這入つて居るので大に困つた。そこで氏は如何にして其の牡牛が這入るかと思ふて、常に其れに注意をして居て遂に其の方法を發見した。其の圍ひの一番下の横木と地面との間に幾らかのアキがあつたが、牡牛は其の側へ行

つて、先づ上向けに横はり、面して背中を動かして其の横木の下から這込むのであつた。斯の如き方法を發明するには、大分發達した思想作用がなければならぬ。牛の知力としては、此れらが最も高等な實例であらうと思はれる。

一五八 鹿の知力

鹿の知力に就て、エルベといふ人が次の如き事實を報告して居る。鹿は楓の若芽を非常に好むものであるから、氏は楓の樹を切り倒して置いて鹿を捕へる工夫をした。雪が一尺餘りも積つて、食物が缺乏するときには、鹿は楓の樹の倒れた音を聞くと、必ず出でて来て、其の芽を摘み食つたのである。そこで氏は其の切り倒した樹の絶頂から二十尺ばかり離れた處に銃を置き、其の引金に釣糸を附け、其の糸の一端を樹の先きに結び鹿が其の樹と銃との間を通るときには、必ず其の糸を脚にかけて銃の自然に發火せなければならぬ様にして置いた。

一五八 鹿の知力

一五八 鹿の知力

其の絲は太さ一インチの六十分の一位の釣絲であつたが、鹿はよく之れを發見して巧みに避けて居たので、此の絲を用ひた時には、一回も成効しなかつた。鹿は其の樹の一方の側を絲から一尺ばかりの所まで悉く食ひ盡し、次に銃の外側を廻つて樹の他の方面に移り、また前の通りに食ひ盡した。而して其の絲には、決して觸れなかつた、エルベ氏は少くとも六十回ばかり之れを試みたけれども、其の結果は何時も同一であつた。そこで氏は、到底鹿の眼に觸れないやうな細い麻絲を用ひて試みた所が其れから鹿が獲られたと言つて居る。

鹿は果して其の装置の何たることを理解し得たか何うか、其れは分らないが、併し其の絲を見て兎に角異様なものだと思ふて警戒して其れに近づかなかつたことだけは確である。此れだけの思慮はあつたものと謂はざるを得ない。

第三十六章 豕の心理

一五九 豕の狼に對する才智

豕は極めて愚な動物のやうに考へられて居るけれども、決してさうではなく、食肉類の最も知力ある動物に亞いて伶俐なものである。其の狼に對する方法などを見ても豕の伶俐なことは分かる。狼が豕の群に來ると豕は大抵バイソンなどのする如くに最も弱いものを中心に置き、最も強いものが外側に立て圓周形に並んで之れに對するのである。シマルタといふ人が、豕の狼に對する才智に就て、クロアチアに於て自から觀察した甚だ面白い事實を擧げて居る。或時二匹の狼が豕の群を目がけて來たが豕は其れを見るや否や忽ち楔形に並び、聲を發し、刺毛を逆立て徐々として狼の方へ進んで行つた。ところが一匹の狼は逃げ、他の方は木へ登つたが、豕は其の下へ行つて之れを取卷いた。而して狼が其の圍みを跳び越えて遁げんとするや否や、彼等は狼を引き下し忽ち之れを殺して了つたといふことである。

一五九 豕の狼に對する才智

一六〇 豕の教育

豕は事柄に由つては、教へると忽ち學び得る性質を具へて居るやうに思はれる。獵に用ふる爲めに牝豕を教育した人があるが、僅かに數週間にして成功して居る。其の嗅感は非常に強いので、雉や、鴨や、兎などを發見するには至極適して居る。而して遙かに犬に優つて役に立つたといふことである。斯る實例は未だ多く聞かない所であるが、併し之れを教育して何か適する仕事に用ひたら大に便利であらうと思ふ。

一六一 豕の發明

ハーディングといふ人は、豕が樹になつて居る林檎を取る方法を發明した事實を擧げて居る。其の方法は林檎畠へ行つて、自分の跡かたで若い林檎の樹を撼り、其れと同

時に、耳を立て、切りに注意して居たのである。而して林檎の落ちる音を聞くと、直ぐ其れを探して食ひ、其れが盡きて了ふと、又た樹を撼つて其の音を聞いて居る。併し撼つても落ちる林檎がないと、其の樹を捨て、他へ行つたといふことである。豕の考へとしては、實に驚くべき發明である。

第三十七章 翼手類の心理

一六二 蝙蝠の人血を吸ふ話

翼手類と稱するは、前後兩肢并に尾が一種の飛膜で連綴されて居て、空中を飛行する哺乳類である。アブラムシ、ヤマカハホリ、キクガシラ及び小笠原島に産する寒號虫等皆此の類に屬するのである。

昔から、蝙蝠は人間の眠て居るときに、其の血を吸ふものだといふ話があるが、ベートといふ人の説に據ると、此れは確かな事實であつて、多くの種類の蝙蝠が此

の性質を具へて居るといふことである。併し血を吸はれて知らずに眠つて居るやうな人は甚だ少いと氏は言つて居る。

歐羅巴の東部や、南亞米利加などに産する蝙蝠の一種でヴァンパイア (Vampire) と稱するものがある。此の蝙蝠は夜間人の眠つて居るときに出て来て、血を吸ふて人を殺して了ふものだといふことを歐羅巴人は一般に信じて居る。併し實際に於ては、此の種の蝙蝠は決して人に害を與へないといふことである。

一六三 蝙蝠の知力

オオカバネ 寒蟻虫の一種にプロロプス ヴアルガリスと稱するものがある。クラークといふ人は自から此の蝙蝠を飼つて色々な観察を施したので、其の知力に關することを述べて居る。飼主が其の蝙蝠の居る部屋へ這入つて來ると、蝙蝠は忽ち聲を發して之れを歓迎する。而して飼主が早速手に取つて可愛がつてやらないときには、其の着物

に攀ぢ登つたり、頭を擦り附けたり、手を舐めたりするのである。

又クラーク氏が何か其の手に持つて居るときには、蝙蝠は其れを見たり、嗅いだりして、切りに吟味した。又た氏が坐はるときには、其の椅子の背せきにブラ下ブラ下がつて一々其の舉動に注意して居たといふことである。

蝙蝠類の心理に就ては、別に精しく研究したものは未だないが、併し上に述べたクラーク氏の觀察に據つて考へると、彼れらの知力は比較的進歩して居るものやうに見える。

第三十八章 食肉類の心理

一六四 アシカ オットセイ等の類

アシカ、オットセイ等の類は、鯨脚類 (Pinnipedia) として之れを食肉類と別にする學者もあり、又た食肉類に屬せしむる學者もある。茲には唯だ便宜上から、後者

一六五 カハチソの知力

の分類法に従つて、之れを食肉類の下で説くことにする。

此の種の動物は、其の自然の状態に生棲して居る場合に於ては、殆ど之れを観察する機会がない、従つて其の心作用の如何も亦た殆ど分らないのである。併し之れを飼養して馴らすときには、其の心作用の大に進歩して居る動物であることが分かる。彼れらは一たび馴らされると、大に人を慕ひ、人に愛せらるゝことを好む。又た其の飼はれた場所に愛着する傾向が甚だ強いといふことである。

一六五 カハチソの知力

カハチソは比較的知力の進んで居る動物で、教育され得べき性質を具へて居る。之れを適當に教育して、魚を捕へて主人の許へ持ち歸ることを教へると、其の通りにするといふことである。ゴールドスミス氏は此れに就て自分の観察した一つの事實を擧げて、或人がカハチソを飼つて居たが、其のカハチソは主人が命令を下すと忽ち

池の中へ跳び込んで、魚を悉く池の片隅へ追ひ寄せ、其の中から一番大きな魚を捕へ、其れを口に啣へて主人の許へ持つて來たのを見たと言つて居る。ピングレー氏の如きも亦た、此れと同一の事實を澤山擧げて居る。

一六六 熊の知力

熊には色々な種類があるが、心理上の階級に於ては、何れも餘ほど高等の位地に立つて居る。其の知力は大に進んで居るので、場合に應じて實に伶俐な動作をすることがある。此れは或種類の熊が教育に依つて巧みに種々の藝をするのを見ても分かる。若し如何なる種類の熊でも、人間が之れを隨意に教育することが出来たら、其の知的動作は大に發達するに相違ない。然るに、熊は種類によつては其の性質が非常に猛烈なので、之れを教育することなどはトテモ出来ない。併し此れらの熊は却つて驚くべき知力的動作を自然に現はして居る。彼等の知力の進んで居ることは

一六六 熊の知力

一六六 熊の知力

寧ろこれによつて知れるのである。

ハチソンといふ人は、北極産の熊に就て甚だ面白い観察をして居る。或日ロンドンの動物園に於て、熊に一つの菓子^{ミツメ}を投げ與へた人があつたが、其の菓子は池の中へ落ちた。然るに熊は水の中へ這入るのが嫌な容子で、池の縁へ立つて其れを見て居たが、暫らくすると、其の前肢で頻りに水を掻き廻はし、水の環流に依つて其の菓子の自然に己れの方へ流れて来る工夫をした。而して一方の前肢が疲れると、又た他の前肢を以て前と同一の方向へ頻りに水を掻いて居た。ハチソン氏は其の工夫の巧みなことに大に感服して、仕舞まで之れを観察して居たと云つて居る。

有名なる昆虫學者ウエストロップ氏も亦た之れと同一の事をワイエンに於て観察したといふことである。斯る工夫は餘ほど知力が進んで居なければ決して出来ることになからうと思ふ。

又たスコレスビーといふ人も、北極地方の熊に就て、下の如き實例を擧げて居る。

或時水夫等が北極地方の氷田に於て、一匹の牝熊を追撃したことがある。ところが其の熊は二匹の兒を伴れて居たので、其兒の歩みの遅い爲めに追ひかけられんことを非常に心配して絶えず周囲を見廻はし、一種の動作と聲とに依つて、其の兒に早く走れといふ合圖をしながら、先きに立つて馳けて行つた。然るに到底駄目だといふことを知るや否や、其の兒を擔いだり、後から押ししたり、或は一匹づつ交々前方へ投げ出しながら驅けた。斯の如くして兒の足の遅いのを助けて、遂に其の追撃を逃れ得たといふことである。危急の場合に臨んで斯る知慧の出るのは、其の知力の進んで居ることを證して居る。

一六七 テンの愛らしき性質

鼯鼠科に屬するもので、黃鼯と稱する動物がある。此の動物は通常人を見ると大に恐れるけれども、之れを飼養して馴らすと、よく人に懐いて甚だ愛らしい動作を

一六八 イタチの奇異なる本能

する。之れに就てロマンニス氏が一つの事實を擧げて居る。或婦人が一匹のテンを飼つて居たが、其のテンは飼主によく懐いて、丁度小猫の如くに指にジャンプしたり、頭や頸へ跳び上つたり、又た手を出すと三四尺も向ふから其の手に跳び着きなどして戯れて居た。又た人の二十人も居る中で、よく其の婦人の聲を聞き分け、其の婦人の聲がすると、他の人を跳び越えて驅けて來た。又た其の婦人が抽斗か箱か開けるか、或は書物か新聞でも廣げると、直ぐ驅けて來て切りに注意して其れを覗いたといふことである。

一六八 イタチの奇異なる本能

イタチには實に奇異なる本能を具へて居るものがあるので、此れに就いてアリソン教授が一つの面白い事實を擧げて居る。枯れた草の中にイタチの巢があつて、其處にイタチの兒が五匹居た。ところが其の傍に一つの穴が造つてあつて、其の中か

ら大きな蛙を四十四と蟾蜍を二匹発見した。此れはイタチが自分の食料に供する爲めに蓄へて居たのである。皆生きては居たが、併し極僅かしか這ふことが出来なかつた。そこで不思議に思ふて試験をして見た所が、一々巧みに腦を刺してあつた。此れは蛙が生きて居ても這つて行くことの出来ない爲めにしたのである。斯の如くして蛙類を蓄へて置くのは、極めて功みな方法と謂はざるを得ない。併し此れはイタチが自から考へ出した方法ではなく、一種の本能であるらしく思はれる。

一六九 フェレットの知力

イタチに類する動物で、フェレットと稱するものがある。此れは元アフリカ産の動物であるが、兎を穴から追出すことが非常に巧みなので、歐羅巴では之れを飼養して兎狩に用ひて居る。此の動物は知力が大に進んで居て、記憶力なども餘程強く又たよく大に懐いて、教へれば色々な藝をもするのである。

嘗てロマニース氏は一匹の大きなフェレットを飼つて居た。其のフェレットは人に愛されることを大に喜び、外へ伴れ出すと犬の如く人に附いて歩いた。又た之れに種々の藝を教へた所が、全く犬と同様によく覺えた。而して數ヶ月間も他へ遣つてあつて、其の間は學んだ藝を少しもせず居たが、併し數ヶ月の後に再び之れをやらせて見たら、一々以前の通り完全にやつたさうである。其の記憶の非常に善いことは此れに據つても分かる。

又たロマニースはフェレットには夢を見ることがあるらしいと言つて居る。何故かといふに、フェレットの熟睡して居る時に、丁度兎を追ふて居るやうな風に突然鼻を動かしたり、爪を引込めたりすることを、氏は屢々目撃したのである。又た或時氏は兎を狩つて居て、家から一マイルばかり離れた處で、フェレットを見失つた然るに數日経てから、再び家へ歸つて來た。猶ほ之れと同一のことは、ロマニースの狩友達のうち屢々あつたさうである。之れまたフェレットの記憶の確かなことを證するものでもある。

を證するものでもある。

一七〇 他の食肉類に就て

以上述べた所の動物は、食肉類中では下等に位して居るものゝみであつて、此の外に猶ほ高等なるものが二種ある。其れは犬科と猫科とに屬する諸動物である。而して犬科のうちには、狼があり、狐があり、狸があり、又た最も伶俐なる犬がある。又た猫科のうちには、猫、虎、獅子、豹等の諸動物がある。要するに、此れらは皆前に述べた熊科及び鼬鼠科の動物と同じく食肉類に屬するものである。然るに猫や犬の如きは、其の心理的階級に於て大に進んで居る所もあり、又た觀察された材料も比較的澤山あるので、別に編或は章を設けて之れを述ぶるが當然である。だから此れらの動物に就ては、後に至つて更めて述ぶることゝなし、此の章の下に述ぶる食肉類は以上擧げた以外の動物に止めて置く。

一七一 飼兎の知力

第十編 兎及び鼠の心理

第三十九章 兎の知力

一七一 飼兎の智力

兎は齧齒類(Rodentia)に屬する動物であつて、其のうちには飼兎(英語のラビット)と野兎(英語のハアー)との二種類がある。何れも其の知力は左ほど進歩して居る。故に唯だ其の著るしい點のみを述べることにする。先づ飼兎の方から始めて行く。兎狩りをしたものは、何人も飼兎の性質の痴鈍なこと、經驗に依つて新たに學ぶ性質の缺乏して居るとに氣の附かないものは無からうと思ふ。此れ飼兎の著るしい特質であると謂つても宜い。若し驚かされるとときには、忽ち自分の穴へ駈けて行くが、併し穴の近くへ達すると直ぐ這入らずに、地面に平伏して追撃者を見て居ることが屢々ある。此れは好奇心の勝つて居る爲めであるか、或は自分の穴の側だから

安全だと誤想して居る爲めか知らないが、とに角彼れらが捕はれ易いのは之れが爲めである。

併し他の點から見ると飼兎は全く經驗に依つて學ぶことの出来ない動物といふ譯ではない。西洋ではフェレットを伴れて兎狩をした人の能く知つて居る所であるが前に屢々フェレットを入られたことのない穴へ之れを入れてやると、直ぐ兎は跳び出して来る。此れを穴の外に獵夫の鐵砲を持つて待受けて居ることを知らず、唯だフェレットに傷けられることを恐るゝが爲めである。然るに、屢々斯る經驗をすると、フェレットを入れてやつても容易に出て來ない。是れ即ちフェレットが這入つて來れば必ず外部に獵夫の待ち受けて居ることを經驗に依つて知つて居るからである。

一七二 野兎の知力

一七二 野兎の知力

一七二 野兎の知力

野兎は飼兎に較ぶれば、其の運動も活潑であり、又た其の知力も幾らか優つて居る。野兎は自分の足が其の通つた路へ香を残して行くことを知り、其れに由つて危険の己れに及ばんことを考慮するのである。故に休む爲めに穴へても遁入らんとするときは、決して眞直ぐには行かない。先づ種々の方向へ跳び廻はり、其の路を出来る限り複雑にして、其れから仕舞に非常な力て其の目的地へ跳び込むのである。此れは自分の歩いた路の知れて居る爲めに、追撃の及ばんことを考慮するからである。斯る考慮の内には複雑なる知力作用の含まれて居ることは明かである。

又た野兎が犬に追撃されて困つたときに、羊の群に混入して之れを避けたとか、或は一匹の野兎が犬に追はれて疲れると、他の野兎の寝て居る處へ潜り込み、其れを己れの代りに遁げさせるとか、野兎は追撃者を迷はす爲めに自分の居る場所から一マイルも離れた池の中へ跳び込むとか、狐などの侵撃を避くる爲めに、犬小屋の側へ寝るとかいふやうな種々の話がある。此れらは無論一々信ずることは出来ないが

併しとに角、野兎は飼兎よりも幾らか知力の度の進んで居ることは確かなやうに思はれる。

第四十章 鼠の智力

一七三 鶏卵を運搬する方法

鼠と稱する中には、色々種類があるから、必ずしも一様に謂ふことは出来ないが、随分知力の發達したものが其の中にあるやうに見える。併し其れらの鼠に就いて委しく述べる譯には行かないから、其の知力の現はれた著るしい實例を二つばかり挙ぐるに止めざるを得ない。

鼠が鶏卵を盗んで、其れを自分の巢へ運搬するといふ話があるが、此れは多くの學者の觀察した所であつて、疑ひのない事實である。ロッドウエルといふ人は、二匹の鼠が澤山の鶏卵を天井から椽の下へ運んだ事實を舉げて居る。カーペンターも

一七四 罅の中より巧みに油を盗む

亦た同様の事實を知つて居る。又た或人の觀察に據ると、鼠は卵を上部の部屋から下の部屋へ運ぶのみならず、下から上へも運ぶといふことである。如何なる方法で其れを運ぶかといふに、先づ雄の方が頭を下へ向け、前肢で立つて、其れから後肢を上へ擧げて、其の間に卵を挟み、而して之れを出来るだけ高く差し上げるのである。さうすると雌の方は一段上に立つて居て、前肢で其れを受取り、而して雄が其の段へ跳び上がつて、再び其れを受取るまで堅く抱いて居るのである。階子の一段々々に斯の如き方法を反覆して、仕舞に其の絶頂に達する。其の方法の巧みなることは實に驚かざるを得ない。

一七四 罅の中より巧みに油を盗む

口の細い罅の中に入れてある油を鼠が一夜の中に悉く嘗め盡して了ふことがある。此れは多くの人の觀察して居る確かな事實であるが、何ういふ方法で之れを嘗

めるかといふに、其の方法は實に面白い。先づ一匹の鼠が罅の上へ登り、而して自分の尾を罅の中へ差し込み、其れに油が着いた所で引き上げて、他の鼠に嘗めさせる斯の如き方法を互に代るく行つて、罅の中にある油を嘗めるのである。だから假令その口は細くとも、鼠の尾の這入る限りは、之れを盗むことが出来る。

以上述べた二つの工夫は、餘ほど進んだ知力作用がなければ決して出来る所でない。されば此れらの事實に據つて鼠の知力の發達して居ることは略ぼ知れるのである。

一七四 罅の中より巧みに油を盗む

第十一編 象の心理

第四十一章 象の記憶

一七五 十八ヶ月前の記憶

象の心作用の大に進んで居ることは、世人のよく知つて居る所で、此れに就ては昔から色々な面白い話が澤山ある。無論其の中には學問上の材料となるだけの價値を具へて居ないものもあるが、併し兎に角其の心作用の著るしく發達して居ることは疑ひなき事實である。是れから、多くの人の觀察した材料中で最も確實と認めらるゝものを擧げて、象の心理の知れて居るだけを述ぶる積りである。

先づ記憶のことから述べて行くが、象は餘ほど記憶の善い動物である。たび馴らされて種々の藝を覺えた象が、遁げて行つて多年野生の境遇に居り、後再び捕へ

られたときには、以前學んだことを大抵記憶して居るといふことである。此れに就ては種々の實例があるが、茲にはコールスといふ人の自から觀察したものを擧げることにする。

或時一匹のよく馴れた象が、荷物を運搬して居たが、突然虎の香がして來たので其れに驚いて遁げて了つた。其れから野に居る象の群に加つて居たが、十八ヶ月の後に以前の飼主が之れを見附けて、再び捕へて來た。ところが其の性質は非常に猛烈になつて居て、野生の象と少しも違はなかつたので、若し人が其れに近づければ忽ち鼻を以て投げ飛ばした。だから一時は何人も其れに近よることは出來なかつた。然るに以前此の象を使つて居た人が、他の馴れた象に乗つて其の傍に行き、而して此の象に移つて其の耳を掴み、座はれといふ命令を下した。ところが此の命令を聞くや否や、以前の記憶は悉く再現して來たので、忽ち其の命令に従つて座はり、且つ一種特別の聲を發した。此れは以前いつも發して居た所の聲であつた。十八ヶ

一七六 十五年以前の記憶

月間前の記憶の繼續して居たことは此れに據つて分かる。暫らくの間野生の境遇に居たから、此の記憶は一時潜伏して居たに相違ないが、以前聞き慣れた聲を聞いた爲めに其れに依つて再び以前のことを想ひ出したのである。

一七六 十五年以前の記憶

コールス氏は猶ほ著るしい一つの事實を擧げて居る。僅かに二年間飼養されたのみの象が遁げて行つて、十五年間野生の境遇に居て、後再び捕へられて來たことがあつた。然るに此の場合に於ても、一たび命令の語を聞くと同時に、十五年以前のことを悉く細かに想ひ出したといふことである。

十五年といふは實に長い歲月であるが、僅かに二年間慣されたのみで、此の長い間全く違つた境遇に居ながら、悉く其れを覚えて居たとすれば、其の記憶の如何に長く續くかといふことは此れに據つても分かる。ブリニーといふ人は、象は老年に



所るぐ逆在中林森てけ受を撃徒ーヲヨシ種一の象

至るも其の幼時の使用者を忘れないと言つて居るが、上述の事實に徴して見ると、或は其うであるかも知れない。上に述べたやうな實例で、充分信據するに足るものは、猶ほ外にもあるが、其の性質は大抵同一であるから、特に擧ぐる必要はなからうと思ふ。

果して幾年間、如何ほど精密に象の記憶が続くか、其れは無論分らない。併し兎に角、象は記憶の善い動物であつて、一たび教へ込まれた事は長い間之れを忘れないといふことは、疑ひのない所である。

第四十二章 象の感情

一七七 怨恨の情

象は怨みを含むことの強い動物であるといふことは、昔から俗諺ことわざとなつて居る程である。元來象は寛大なる感情に富んだ動物であるにも拘はらず、一方に於て斯く

(〇九二)

怨恨の情の強いのは、他から加へられた不正の所行に對して甚だ憤ふる爲めてあるらしい。

シツプといふ人が象の復讐に就て面白い實驗をして居る。『パン』へ『バタ』を塗り、其の中へ蕃椒を入れて、之れを象に與へた。象は其れを喰つて蕃椒の爲めに大に苦んだのである。而してシツプ氏は六週間経てから、再び其の象の居る處へ行つて、從前の如く之れを可愛がつてやつた。ところが暫らくの間は、別段復讐しやうな容子も見えなかつたが、象は始終機會を見て居て、遂に其の鼻に一パイ泥水を吸ひ込み之れをシツプ氏に頭から足までアビセ掛けたといふことである。

又たテンネント氏も象の復讐に就て一つの事實を擧げて居る。或時セーロン島の一土人が象に傷を負はせた。ところが象は大に怨んで其の土人を何處までも追ひかけ、遂に衆人の見て居る中で之れを踏み殺して了つたといふことである。

又たグリフスといふ人も象同士の復讐に就て一つの事實を擧げて居る。其れは一

心 の 物 動

象

情 感 の

(一九二)

千八百五年に、英軍がプールトポールの市街を攻めた時のことである。市街へ達する途中で、氣候が非常に暑く、水に缺乏した爲めに、大きい井を見附けると先きを争ふて水を飲みに行く有様であつた。或時二匹の象が大きな井へ一所に水を飲みに行つた。其の一匹は非常に大きな強い象で、他の一匹は比較的小さい弱い象であつた。小さい方は鼻の先きに桶を持つて居たが、大きな方は其れがなかつた。そこで大きな方は其の桶を奪ひ取つて了つた。小さい方の象は大に之れを恨みに思ふたらしかつたけれども、力の弱い爲に一時は其れを忍んで居た。然るに何うかして其の恨を返さんと絶えず機會を窺つて居たので、大きな方が井の側へ立つのを待つて、自分は筋かに後へ下がつて、頭で力限り其れを前方の方へ突きとばした。大きな方は突然後から突かれた爲めに、全く井の中へ突き落されて、非常な困難をして出て来たといふことである。

斯の如き事實は猶ほ澤山あるが、要するに、象は已れに何か害を加へらるゝか、

一七八 同情

或は不正なことをされると、大に其れを怨んで、必らず復讐せんとする傾向の強い動物である。斯る感情上の特質は、猿を除いては象が一番強いらしく思はれる。

一七八 同情

象は又た同情の著るしく發達して居る動物である。此れに就ても多くの實例があるが、茲には唯だ二三の事實を擧ぐれば充分であらうと思ふ。ヒューベルといふ人は、或時一匹の象が弱つて倒れた爲めに、飼主が他の象を伴れて來て其れを起させんとして居る所を見た。健全な方の象が倒れて居る象を始めて見たときに、其の驚き且つ同情を起した容子は人間と少しも違はなかつたといふことである。飼主は倒れて居る象の頸や胸に鐵鎖をかけ、他の象をして其れを引張らせた。然るに一二分間強く引張つた所が、倒れて居る象は苦しうな聲を發した。此の聲を聞くや否や、健全な方の象は忽ち引くことを止め、大きな聲を發して倒れて居る象の側へ馳せ來

り、其の鼻と前足とを以て鐵鎖を弛めた始めさうである。此の動作は如何に同情が強いかといふことを表はして居る。

テンネント氏も亦た象の同情に厚いことに就て一種の事實を擧げて居る。象の群のうちで、狩人が一番目指されるのは、牙の長い象である、それで牙の長い象が、其の一群の先導者になつて居ると、他の多くの象は之れを保護する爲めに、あらゆる力を盡すのである。而して狩人に追ひ詰められて到底免れる路のない場合には、其の先導者を真中に置き、一群の象が其の周圍を取巻いて、狩人が容易に之れを射撃することの出来ないやうにする。或時牙の長い象が狩人の爲めに傷けられたところが他の象は忽ち之れを取巻き、肩と肩との間に之れを支へ、其の身軀の見えないやうにして之れを森林中に伴れて行つたといふことである。

又た象の人間に對する同情に就ては、リュバロン、デュロリストンが印度のラクノールに於て觀察した有名な話がある。嘗てラクノールに於て激烈なる傳染

一七八 同情

一七九 排他的感情

病が流行し、土人が病氣に侵されて續々路に倒れて居たことがある。其の時分ラクノールの總督が象に乗つて病者の倒れて居る路を通つた。總督は路上に倒れて居る男が、象に踏み殺されることには少しも頓着しなかつたが、象は決して之れを踏ま^ず、倒れて居る人間の間を歩^きくに、決して其に害を與へないやうに一步毎に大に心配して歩いたといふことである。此れに據つて見ると、象は單に己れの同類に對して同情を有するのみならず、又た人間に向つても之れを有し、而して其の人間に對する同情は、或種類の人間が己れの同類に對する場合よりも遙かに強いのである。

一七九 排他的感情

象は極めて排他的感情の強い動物である。甲の群ぐんに屬して居た象が乙の群へ入れるやうな場合には、乙の群の象は大に之れを排斥して、決して親まない。此の感情上の特質に就て、テンネント氏は自己の觀察上より左の如く言つて居る。

象は何かの事情に由つて己れの群から引離さるゝときには、何れの群にも屬することは出来ない。他の群の近傍で草を食つて居たり、或は水を飲むとか、身體を洗ふ爲めに、屢々同一の場所に出會つたりしても、決して共に交はり親しむやうなことはない。又た假令同一の圍ひの内へ入れられて、其の群の象と混合せなければならぬ様な境遇に置かれて、決して親しむことはない。而して若し他から這入つて来た象が親まんとすれば、忽ち之れを排斥して大に苦めるのである。

一八〇 悲みの爲めに頓死す

象には甚だ奇妙な感情上の特質がある。其れは何かといふと、一種の感情の刺戟に由つて頓死することである。印度の土人などは、之れを象の『悲しみ』と稱して居る。何人も知つてゐる通り、象は大きな強い動物で、其の自然の生命の甚だ長いものである。然るに謂ゆる『悲しみ』の情が起ると少しも形骸上に異状のないのに、突然

一八〇 悲みの爲めに頓死す

一八〇 悲みの爲めに頓死す
倒れて頓死することがある。

此の奇妙な特質に就ては、印度の土人のよく知つて居る所であるが、歐羅巴の學者も屢々之れを観察して居るので、色々な話がある。テンネント氏は、或時一匹の象が己れと同類の倒れて居るのを見て、非常に悲哀の情を起した容子であつたが暫らくすると自分も辭かに横臥したまゝ死んで了つたと言つて居る。

又た船長ユール氏も其の紀行中に象の頓死のことに就て書いて居る。或時英國公使に象の訓練を示す爲めに、新たに捕へた一匹の象を伴れて來た。ところが其の象は頸に環を箝めらるゝことを嫌つて大に之れに反抗し、而して恰かも死せるが如くに横臥した。然るに強いて之れに頸環を箝めんとして居たら、象は突然後肢で立ちあがつて、後へ倒れて了つた。而して其のまゝ死んで居たといふことである。

之れと同じやうな實例は、猶ほ他にもあるが、要するに、象は唯だ悲しみの爲めに頓死するばかりでなく、非常に厭いやなといふ様な一種の不快の情が激しく起るとき

は形骸上何等の異状もないのに、其の感情の刺戟に由つて、突然倒れて死すもの、やうに思はれる。象の如き大きく且つ強い動物が、感情の激動の爲め頓死するのは、實に奇妙である。

第四十三章 象の知力

一八一 象の用心深きこと

象は其の知力の大に進んで居る爲めに、甚だ用心深くして、危険なことは決してしない。船長シップ氏は此れに就て自から面白い經驗をしたので、其の事を自分の記録中に載せて居る。嘗て英國の軍隊が印度の山地を通つたときに、シップ氏の屬して居る隊が險はしい坂路へさしかつた。伴れて居る象をして其の坂を登らしむる爲めに、丸太で階段を造つたのである。而して其の準備が凡て出来上つたから、先づ一匹の象を其處へ伴れて來て、其の階段を登らせんとした。

ところが其の象は、先づ其の足場を精密に吟味し始めた。自分の鼻を以て其の九太を壓して見て、充分堅固なことを見定めた上で、猶ほ大に注意して一方の前足を其處へ載せた。其の次に足をかける處は、突き出た岩であつたが、其れにも矢張り同様の注意をしてから登つた。其れから次に登るのは又た木の丸太であつたが、先づ鼻で壓して見た所が、危険だと思ふたと思ふた見えて其れに登ることを好まなかつた。そこで色々勵ましたり、強迫したりして登らせんことを試みたが、決して其れに登らなかつた。其れから少しく其の丸太の置き工合を變へた所が、やうやく安心して登つた。而して其の坂の頂上に達するまで、一段毎に斯の如く充分吟味した上でなければ、決して其れに足をかけなかつたといふことである。其の甚だ用心深いことは之れに據つて分かる。

一八二 鼻の達せざる處にある物を取る方法

一八二 鼻の達せざる處にある物を取る方法

誰れも知つて居る通り、象は鼻の先が手の用をするので、其の前へ食物でも投げやると、鼻を伸ばして巧みに其れを取るのである。然るに其の取らんとする物躰が、鼻の届かない處にあるときは、實に面白い工夫をして其れを近づかせる。エッセ氏は此れに就て次の如き觀察をして居る。

或時エッセ氏は象に自分の手から馬鈴薯ジャガイモを興へて居た。ところが圓いのが一つ床の上へ轉がつて、象の鼻の届かない處へ行つた。そこで象は其處まで鼻を届かせやうとして屢々試みたが、何うしても届なかつた。ところが仕舞に面白い工夫をした充分力を入れて其の馬鈴薯を壁の方へ吹き飛ばして了つたのである。そこで其の馬鈴薯は壁に衝き當つて、象の近くへはね返つて來たので、困難なく其れを取ることが出來たのである。

グーティンも亦た之れと同種類のことに就て甚だ面白い觀察をして居る。動物園に於て、地面に何か小さい物が投げてあつて、象は其れを取らんと試みたけれども、

一八二 鼻の達せざる處にある物を取る方法

何うしても届かなかつた。ところが其の象は、前述の場合とは一歩進んだ面白い工夫をして其れを取つた。四方から反動して来る空氣の運動か其の物體を自分の近くへ持つて来るやうに、其の物體を越えて向ふの方を眼がけて、鼻で力限り吹いたのである。前のは物體を直接に吹き飛ばしたのであるが、此の方は空氣の運動を巧みに利用したので、其の考へは實に感服すべきである。

一八三 象の理解力及び理性

嘗てカルカッタの監督(Bishop)であつたダニール ウイルソンといふ人が、象に理解力及び理性の大に發達して居る事實に就て次の如き觀察をして居る。ウイルソンの教會區内に住んで居た一機關士の所有して居る象が眼病にかゝつて、全く眼が見えなくなつた事がある。そこで所有主はウイルソンのよく知つて居るウエツプといふ醫者に其の治癒を頼んだ。ウエツプ氏は象を坐はらせて置いて、一方の眼に

硝酸銀を入れた。ところが象は其の痛みの激しい爲めに、恐しい聲を發して叫んだ。然るに忽ち其の効驗が現はれて、眼は大に回復し、幾分か見えるやうになつた。

其れからウエツプ氏は翌日また他の一方の眼にも同様の治療を施すことになつた。ところが象は治療の爲めに引き出されて、醫者の聲を聞くや否や、忽ち自から横はり、頭を一方に傾け、鼻を巻き、恰かも人間が痛い手術を受くる時の如く、氣息を殺して待つて居た。而して其の手術が終つたときには、鼻を動かしたり、或は其の他の身振をしたりして、確に謝意を表はすやうな容子をした。

ウインソンは言つて居る。象に記憶や、理解力や、理性の大に發達して居ることは此れに據つて分かる。即ち此の象は、始め一方の眼が手術を受けて良くなつたことを記憶して居て、其翌日同一の場所へ伴れて來られて、手術者の聲を聞いたときには、他の方の眼にも同様の手術が施されるのだといふことを推知したのである。又たビングレー氏も動物の心に關する其の著書中に、之れに類した一つの事實を

一八四 象の抽象的觀念

舉げて居る。嘗て印度に於て一匹の若い象が、其の頭に激しい傷を受けて、其の痛みの爲めに全く狂氣の如くなつて、其の傷口に治療を施さんとしても到底之れを御することが出来なかつた。若し人が其の傍へ近づくときは、大に怒つて駆け出し、五六ヤード以内には決して人を近寄らせなかつた。

然るに其の世話をして居る人が、遂に一種の妙案を發明した。言葉や合圖を用ひて、象の母に意を通じて見た所が、忽ち其れを理解して自分の兒を捕へ、而して大に苦んで呻るにも拘はらず、外科醫が其の傷口に手術を行ふ間、堅く壓へ附けて居た。其の傷の全く癒るまで毎日手術を施したのであるが、そのたびに必らず母が捕へて壓へて居て、差支へなく手術を施したといふことである。之れまた其の理解力及び理性の大に發達して居ることを證するものである。

一八四 象の抽象的觀念

象には常に理解力や理性の發達して居るのみならず、又た種々の事實に徴して考へるときは、自分の經驗に依つて、幾らかの抽象的觀念をも作り得るやうに思はれる。此れに就てゼンキンスといふ人が自から觀察した所をロマニース氏に報告して居るものがある。左に述ぶるのは即ち其れである。

新たに捕へられた象は、先づ地面にある物を取つて、肩に乗つて居る御者に其れを興へることを教はるのである。然るに始めの数ヶ月間は、着物のやうな柔かい物を取ることに就て之れを教へるので、堅い物を取らすのは甚だ危険である。何故かといふと、非常の力を以て肩の上へ投げ上げるから、堅い物であると其れが爲めに御者が甚だしく傷つけられることがある。だが、其れから暫らくたつと、象は其の取らされる物の性質が段々分かつて來るので、着物のやうな柔かい物であると強く投げ上げるが、併し鐵挺や鐵鎖の切の如き重い物であれば、極靜かに之れを御者の手に渡すのである。又た刃物などを取上げるときには、象は先づ柄を持つて其れを

己れの頭の上に載せ、而して御者が其の柄を掴んで取ることの出来るやうにするのである。

センキンス氏は試験の爲めに、象の未だ曾て見たことのない物を取らせて見たことがある。ところが象は其れを堅質、鋭利、重量等の如き性質を具へて居る物体を取扱ふやうな方法で、極めて丁重に手渡しをしたといふことである。以上の事實に據つて之れを考ふるに、象が暫らく種々の物体を經驗して斯の如くなつたときには柔かい、堅い、鋭い、重いといふやうな單に物の性質に關する抽象的觀念を持つて居るに相違なからうと思ふ。此れは以上の實驗に徴して疑ひのない所であるとセンキンス氏は言つて居る。

一八五 象の才智

象の才智に就てフアルニスといふ人の觀察した面白い事實がある。英國の中央公

園に於て、暑い日に象が小屋の外へ出してあつた。其の傍に、刈りたての草が澤山積んであつたが、象は鼻で其の草を一巻きづゝ取つて、己れの背中へ巧みに載せた。而して背中が全く青草で日蓋ひがされて了ふまで其の働きを續けて居た。其れから背に青草の屋根が出来上つたら、其の成效を喜ぶやうな容子で、靜かに立つて居たといふことである。

又た之れと同一のことは、同じ動物園の監督者たりしコンクリンといふ人も觀察したと言つて居る。炎天に青草を背中へ載せて日蓋にするといふことは、甚だ巧みな工夫であるが、象が自から發明して斯ることをするのは、即ち其の才智の進んでる證據である。

又た象は高い處へ登らんとするときは、面白い工夫をすることがある。其の近傍に何か適當な材料があると、階段のやうに一段々々に高く其れを積み上げ、自分で階子段を造つて、其れに依つて登るのである。斯の如きも余ほど才智が進んで居な

一八六 巧みに菓子を盗む
ければ出来ることではなす。

一八六 巧みに菓子を盗む

タウンセンドといふ人の自から自撃した事實で、象の才智に關する猶ほ面白い話がある。或日印度の土人が、タウンセンド氏の家の前にある樹へ象を繫いで置いて、其れから少し離れた處へ竈を造り、菓子を焼かんとして米の粉で拵へた團躰のやうなものを其の中へ入れ、石と草で其れを蓋ふて、暫らく何處かへ行つて居た。ところが其の留守に象は、鼻で鐵鎖を脱し、竈の側へ行つて、其の蓋を取り、中から菓子を出して悉く食つて了つた。而して又た元の通りに石と草とで竈を蓋ひ、自分の場所へ歸つた。だが自分で鐵鎖を元の通りに箝めることは出来なかつたので、前と同様に見えるやうに其れを足の周圍に巻き附けて、御者の歸つて來たときには、竈の方へ唇を向けて立つて居た。御者はモ一菓子が焼けた時分だと思ふて、竈の蓋を開

けて見た所が何もないので、大に怪んで其の周圍を見廻して居たが、象の容子の變であつたので、象が其れを盗んだといふことを遂に發見して之れを罰した。此の出來事は、タウンセンドの家族が自分の家の窓から悉く見て居たのである。

第十二編 猫の心理

第四十四章 猫の性質及び感情

一八七 一般の特性

猫は虎、獅子、豹など同一の科に属する食肉類である。されど犬と同じく人間に飼養されて居る爲めに、天然の性質が幾らか變はつて、虎や獅子の如くに猛烈ではない。犬と比較すると心理上大に劣つた點があるが、併し兎に角、心作用の大に發達した動物の一つである。

猫は人間に飼養さるゝやうになつてから、其の本來の性質は幾らか變はつたに相違はないが、其れでも猶ほ虎や獅子などと同様なる根本的性質は決して失つて居ない。之れ同じく人間に飼養されて居る動物でありながら、犬と大に其の習慣を異にする所以である。

犬は人間に對しては極めて社交的であつて、大に懐き易いが、猫は全く其れと反對に非社交的であつて、人間に懐き難く、近づき親しむことを好まない。又た猫の習慣は、歩き廻はつて生餌を求むることを好むので、如何ほど人間に大切に養はれて居ても、必らず外を歩き廻つて小さい動物を捕へ、其れを殺したり食つたりする。之れまた犬と全く違つて居る點である。又た犬は天性教訓され易いものであるが、猫は其の性質が極めて頑固であつて、甚だ教訓され難い。何れだけ教訓を與へても殆ど其の効がない。之れ猫の著るしい一つの特性であつて、永い間人家に飼養されて居るにも拘はらず、其の割に心理的變化の甚だ少ないのは、即ち此れが爲めてある。

一八八 感情上の特質

猫に著るしい感情上の性質は、場所に固着することである。己れの飼はれた人に愛着するのではなくして、飼はれて居る場所に固着するのである。無論例外の場合も全くないではないが、併し此れは猫一般の感情であるらしい。如何に愛されて居る人にも、他へ伴れられて行くことは好まない。己れの住みなれた家を離るゝことは猫の大に嫌ふ所である。此れは猫を飼つた人のよく知つて居る所であらうと思ふ。此の特質は何に基くかといふに、ロマニース氏の説に據ると、此れは猫が野生の時分に其の穴に固着して居た本能の猶ほ残つて居るのである。

又た一つの著るしい特質は、他の小動物を捕へて其れを苦めることを好む性質で實に残忍極る所の感情である。猫が鼠を捕へて、其れを長い間苦しめて自から樂んで居ることは、何人もよく知る所であるが、之れ即ち此の感情上の特質に基くのである。猫が鼠或は其の他の小動物を苦しめるのは、他に目的があるのではない、苦しめて其の苦しむ有様を見ることが樂みなので之れを苦しめるのである。

ジョン ステアワート ミルは、人間のうちには、他人の身体上の苦痛に對して當に無頓着であるのみならず、却つて之れを見ることを樂しみとするものがあると言つて居る。然るに、人間以外の動物に於ては、斯る残忍なる感情を有するものは、唯だ猫と猿とのみであるらしい。其の他の動物に於ては、或場合に他の動物を苦しめるのは、何かの目的の爲めに止むを得ず之れを苦しめるに過ぎないので、苦しませることが其の目的になつて居るのではない。

猶ほ猫の感情に就て述ぶべき事はあるけれども、大抵世人のよく知つて居ることであつて、特に述ぶる必要はないと思ふから之れを略して置く。

第四十五章 猫の知力

一八九 動物に關する識別

猫は己れが捕へる動物に就て、幾らかの識別力を具へて居るものと見えて、特に

一八九 動物に関する臆服

珍らしい動物を捕へたときには、其れを食はずに持ち歸つて人に示すことがある。ハツバードといふ婦人は、自分の飼つて居る猫に就て此の事を観察して、其れをマニース氏に報告して居る。其の猫は何時も兎を盗んで来て、豚小屋の隅へ隠れて食ふのが習慣であつた。然るに何時も取つて来るのは灰色の兎であつたが、或時小さい黒い兎を捕へた。ところが其れを食はずに生かしたまゝ家へ持ち歸つて、其婦人の足許へ置いた。此れは黒兎を珍らしものだと思ふて、其れを己れの主人に見せる積りであつたらしい。

其の猫が斯ういふことをしたのは、唯だ此の一回ばかりでなく、其の外にもあつたので、ストートと稱する鼯鼠の一種を捕へて来たときにも、生かしたまゝ家へ持ち歸つて、又た其の婦人に示したといふことである。此れらの事實に據つて考へると、猫は、同じやうな動物の中でも帯々見慣れないものを發見するときには、其の珍らしさといふこと知らしむ。

一九〇 懲罰と訓戒

メルシー スミスといふ人は、自分の飼つて居る猫に就て、其の知力を試めず爲めに面白い實驗をして居る。此は猫の見が不潔なことをするときには、必ず其の母猫を罰することにした。ところが忽ち其の懲罰の結果が現はれて、母猫は其の見を訓戒し始めた。而して小猫が不潔なことをするときには、母猫は何時も其の耳を撃つて之れを戒しめた。斯の如くして遂に小猫に不潔なことをさせない様に教へ込んだといふことである。

一九一 猫の推理

猫は餘ほど推理力の發達した動物であつて、之れに就ては種々の實例がある。茲に其の一二を擧げんに、ジョン マルチンといふ人は左の如き觀察をして、其れを

一九一 猫の推理

ロニーニース氏に報告して居る。

マルチン氏の飼つて居る猫が兒を産んだ。然るに暫らくすると、何かの原因で乳が全く止まつて了つた。ところが其の猫はパンの切を運んで自分の兒を養つて居た。乳が止まつたから、其の代りにパンを持つて行つて養ふことを知つたのは、全く推理作用の結果である。

又たビデイといふ人も、猫の推理力に就て自から観察した所を雑誌「ネーチユア」に報告して居る。或時ビデイ氏は自分の寓居に三匹の猫を残して二ヶ月ばかり旅行をした。そのうちの二匹は、英國産の班點のある猫で、極めて柔和な愛らしいのであつた。氏の不在中は、氏の寓居に二人の若い男が居たが、何時も猫をイジメたり、驚かしたりして楽しんで居た。

ビデイ氏の歸る一週間ばかり前に、英國産の猫が兒を産んだ。而して書室の本箱の後へ其れを隠して人に見えないやうに注意して居た。氏は歸つた翌朝其の猫を見

たから、例の如く頭を撫て愛した。其れから一時間ばかり外へ出て歸つて見ると、小猫は悉く氏の着物を着る部屋へ持つて来てあつた。此れは前に其の猫が兒を産んだ部屋である。そこでビデイ氏は僕に、何うして其の小猫が此處へ来たかと問ふたら、僕は「親が口で一匹づゝ啣へて運んだと」答へた。此れには左の如き推理作用があつたに相違ないとビデイ氏は言つて居る。

「自分の主人が歸つたから、二人の男が小猫に害を加へるやうな心配は既になくなつた。だから自分を保護して呉れる主人に小猫を示し、而して以前安全に兒を育てた其の部屋へ小猫を置くに若くはない」と斯う考へたのである。此の猫は以前その部屋に於て安全に兒を育てた経験のあるにも拘はらず、主人の不在中は其の兒を書齋中に隠し置き、主人の歸るや否や其れを移したのは、ビデイ氏の言ふ如く、確かに上述の如き推理作用に基いて居るに相違なからうと思ふ。

一九二 猫と鏡

(六一三)

猫は鏡に己れの形が寫つたときに、如何に其れを考へるかといふに、此れに就て二人の觀察した事實があるから、茲に其れを述べよう。

其の一つは米國の古生物學者でミックといふ人の嘗て觀察した事實である。ミック氏は研究上の必要から、何時も小さい鏡を机の上へ立て居た。ところが猫が其の前へ來て、己れの形の寫つたのを見て、甚だ不思議さうに其れを敲きなどして色々研究をして居た。其れから猫は、自分と他の動物(即ち己れの影像)との間に、何か物があるといふ結論に達したらしい。而してコワ／＼大に用心して其れに近づき暫らくの間眼を離さず見詰めて居たが、遂に前肢を以て鏡の裏面を敲いた。然るに其處に何も居ないことを知つて、大に驚いた容子であつた。其れから猶ほ暫らく之れを反復して居たが、到底その物の捕ふべからざることを知つたのか、或は其れが

動物の心

面白くなくなつたのか知れないが、遂に止して了つたといふことである。

他の一つはグロウソフといふ人が、雑誌『チーチュア』に報告した事實である。猫は始め鏡に己れの形の映じて居るのを見たときには、其れと闘つた。ところが鏡の抵抗を感じたので、其れから鏡の裏面へ驅けて行つた。然るに彼れが探して居る物はなかつたので、再び鏡の前へ來て、其の影像を見て切りに考へながら、一方の前肢を以て鏡の縁を探つて居たが、遂に其の影像たることを自から知つたらしい。而して其の後は、決して鏡の反射に注意することはなかつたと言つて居る。

一九三 猫の概括的思想

フロストといふ人は偶然の觀察から猫に抽象的思想のあることに氣附いて、其れを雑誌『ネーチュア』に報告して居る。左に掲ぐるものは即ち其の一部分である。

冬になると余(フロスト)の家の奴婢は、朝の食事のときに残つたパンの屑を外へ

(七一三)

猫の知識

一九三 猫の概括的思想

撒いて、雀に施すことになつて居た。余の家に一匹の猫が飼つてあつたが、雀がパンの屑を拾ひに集つて來ると、其の猫は何時も雀を捕へんとして、隠れて潜かに狙つて居た。然るに數日間僕婢がパンの屑を撒いてやらなかつたことがあつた。ところが猫は自分でパンの屑を持出して、其れを草の中へ撒いた。此れは雀を引着ける目的であつたことは明かである。

以上はフロスト氏の觀察した事實であるが、之れに據つて見ると、猫には「パンの屑は雀を引着けるものだ」といふ概括的思想があつて、「自分も雀を引着ける爲めにパンの屑を撒かう」といふ考へを起したものに相違ない。而して此の概括的思想は自分の經驗上から得たものである。

斯る事實は唯だ此の一つの場合のみではなく、クラインといふ人も同様の事實を觀察して、猫には上に述べたやうな推理作用のあるに相違ないといふことを證して居る。又クライン氏の二友人も同様の事實を觀察したといふことで、クライン氏は

雜誌「ネーチユア」へ左の如き報告をして居る。

其の人は冬非常に寒くなると、自分の寢室の窓の下へパン屑を撒いて雀に與へて居た。然るに其の家に奇麗な黒猫が居たが、パン屑が雀を呼ぶことを知つてから、時々其の傍らの小藪の中へ隠れて居て、雀が集つて來ると突然とび出て捕へたのである。或日の午後例の通りにパン屑が撒いてあつたが、併し雀が來なかつたので其の夜少し雪が降つた爲めに、其のパン屑が蓋はれて了つた。ところが翌朝になつたら、猫が頻りに其處の雪を掻いて居たので、不思議に思ふて、暫らく注意して見て居た所が、猫は雪の下からパン屑を拾ひ上げて、其れを一つ々々雪の上へ排べた。其れが濟んだら猫は例の如く小藪の中へ隠れて雀の來るのを待受けて居た。斯の如きことは唯だ此の一回のみでなく、此の外に猶ほ二回ばかりあつたといふことである。

此れら二三の事實に據つて考へると、猫は大に思想力の發達して居る動物であつ

て、確かに概括的の推理をなし得る力があるに相違ない。多くの経験を概括して、「パン屑は雀を引着けるものだ」といふ一般に関する觀念が生じて居なければ、決して斯ういふ工夫をすることの出来る筈はない。

第十三編 狐及び狼の心理

第四十六章 其の總論

一九四 犬との比較

狐も狼も食肉類の一種であつて、吾人の飼つて居る犬と同じく犬科(Canidae)に屬する所の動物である。だから此れらの動物の心作用は根本に於ては無論犬の心作用と同一である。併し犬は人間に飼養せられて居る爲めに、其の影響を受けて、天然の性質が大に變じて居るが、狐や狼は斯る影響を受けて居ない爲めに、其の心作用の犬とは大に違ふ所がある。元來動物學の上からいふと、狐や狼は犬と同一に論ぜらるべきものであるけれども、上に述ぶる如き次第であるから、心理上に於ては之れを犬と同一に見ることは出来ないのだから本書に於ては、之れを犬と別に置き、

犬の心理は後に至つて更に之れを述ぶる譯である。

一九四 犬との比較

犬は永い間、人間に飼養せられて居る爲めに、常に其の性質の變化したのみならず又た犬に其の心作用が發達して居る。其の知力の進歩といひ、感情の發達といひ、猿類を除いては動物中犬に及ぶものはない。然るに狐や狼に至つては、其の心作用は元同一類に屬すとは雖ども、遙かに犬に劣つて居る。心理上から觀察すると、全く別種の動物の如き觀がある。此れは畢竟人爲的の變化を受けない爲めである。若し犬の心理的性質のうちから、人爲の變化に依つて得た所のものを取去り、而して其の本來の野生的性質を一層強めんか、其の狐や狼と同一の位地に下るべきは明かである。斯く一方は人爲的影響の爲めに其の心作用が發達し、他は野生的生活の爲めに其の心作用の發達して居ないといふことは、進化論の上から考察すると實に興味のある點であらうと思ふ。

然るに狐や狼の如きも、全體からいふと、兎に角其の知力の發達して居る動物の

一種たるに相違ない。之れを精密に觀察し得たならば、心理上色々面白い事があらうと思はれる。併し此れらの動物に接近して、種々の試験を施すことは到底出来ないことである。タマに獵夫が之れを觀察する位に過ぎない。だから假令其の心作用が或點に於て犬に發達して居るにしても、之れを知ることが出来ない。故に此れらの動物の心理を説くに當つても、其の材料となすべきものは、僅かに獵夫の偶然の觀察位に過ぎないので、其の種類が甚だ少いのである。併し吾人は之れを以て満足しなればならないのであるから、其の中の重なるものを茲に述ぶることとする。

第四十七章 狐の心理

一九五 兎を捕へる工夫

狐の才智の進んで居ることに就ては、東洋に於ても、西洋に於ても、昔からよく人の知つて居る所である。而して其れに關する色々な話がある。殊に我が國などに

一九五 兎を捕へる工夫

於ては、狐が人間を魅すといふやうな奇談がある。斯る奇談の取るに足らざることは無論であるが、其れのみならず狐の才智に關する種々の話のうちで、學術上の價値のあるものは殆どない。だから狐の知力に就ては澤山材料があるやうに見えて居るけれども、心理學上より考へるときは取るべき材料は實に少いのである。學術上の材料として價値のあるのは、獵夫が狐の兎を取る工夫に就て觀察したものや、罌を巧みに免れる才智に就て實驗したもの位である。狐の知力を示す確かな材料は恐らく此れ位のものであらうと思ふ。

セイント ジョンといふ人は獸獵に關する著書のうちに、狐の兎を捕へる方法に就て下に述ぶるが如き事實を擧げて居る。此れは面白い話でもあり、且つ正確なるものであるから其のまゝ茲に紹介する。

余(ジョン)はロッズシールに住んで居るときに、六月であつたが或朝まだ夜のあけない前に牡鹿を打ちに出かけて行つた。ところが明かるくなりかけて來た頃、一

匹の大きな狐が余の隠れて居る島の縁に沿ふて靜かに歩いて來るのを發見した。狐は非常に注意して島を見廻はし、作物を食ひに來る兎を捕へんとして狙つて居る容子であつた。併し狐は駆けて行て捕へる機會の到底ないことを知つたらしい。そこで暫らく考へて居たが、何か妙案を得た容子で、兎が出遣入りをしうな穴を吟味して、其のうちの一つを選び、而して其の近くに、丁度猫が鼠を狙つて居るやうな態度で待伏せて居た。余は若し狐が余を認めたら直ちに發砲する積りで、待ち構へて居たが、彼れは自分の目的に熱心な爲めに幸ひに余を認めなかつたから、余は一々彼れの爲す所を觀察して居た。

ところが狐は極めて靜かに且つ注意して地面に小さい穴を掘り、其の周圍へ砂を盛り上げて、自分の體の兎に見附からない目的で、屏風の如くに土手を築いて居た。併し時々休んで耳を澄まし、且つ島の方に眼を注いで居た。而して其の土手が出來上つたら、其の内へ潜んで、少しも動かずに兎の來るを見張つて居た。ところが日

一九五 兎を捕へる工夫

の出る頃になつたら、兎が野から其の島へ續々やつて來たが、三匹だけは其の待伏せの場所を通らずに、既に島へ遁入つて了つた。其れから一匹は二十ヤード以内へ來たけれども、狐は少しも動かずに平伏して居た。次に二匹の兎が眞直に狐の方へやつて來た所が、狐は未だ頭を擧げて見なかつたけれども、其の鋭敏な耳は自然に動いて、兎の近づいて來たことを知らせ居た。其の二匹は果して、狐の待伏せて居る間隙を通つた。そこで狐は電光の如き速力を以て跳びつき、其の一匹を捕へて直ぐ殺した。其れから狐は其の獲物を啣へて歸る所であつたから、餘は一發の下に之れを止めて了つた。

以上はセイントジョンの觀察談のまゝを述べたものであるが、狐が兎を捕へる工夫の巧みなることは之れに據つて知れる、此の外に猶ほ同種類の觀察談は澤山あるが別に擧げる必要はない。

一九六 巧みに罌を免るゝ才智

狐は大に推理力の發達して居る動物であつて、罌を免るゝことは極めて巧みである。如何なる種類の罌を用ひても、其れに二匹とかゝることは殆どない。狐の此の才智に就て、レーといふ人が寒帯地方に於て自から實驗した面白い實例があるので、ロマネース氏は其れを著書のうちに掲げて居る。左に述ぶるものは即ち其れである。併し、嘗てレー氏は、寒帯地方の狐を捕へんとして、色々な種類の罌をかけて見た。併し狐は前の經驗に據つて皆之れを知つて居たので、何れも不成功であつた。そこで氏は其の地方の狐が未だ曾て知らない一種の罌を用ひた。其れは一方に餌を備へ、他の方には丸を込めた鐵砲を臺の上に載せて、其の餌の方へ口を向けて置き、其の間に絲を引き、而して狐が餌に觸れると同時に、鐵砲が鳴つて、自然に之れを殺す工夫であつた。此の裝置をするには、鐵砲は餌から凡そ三十ヤードの距離に置き、

一九五 兎を捕へる工夫

の出る頃になつたら、兎が野から其の畠へ續々やつて來たが、三匹だけは其の待伏せの場所を通らずに、既に畠へ這入つて了つた。其れから一匹は二十ヤード以内へ來たけれども、狐は少しも動かずに平伏して居た。次に二匹の兎が真直に狐の方へやつて來た所が、狐は未だ頭を擧げて見なかつたけれども、其の鋭敏な耳は自然に動いて、兎の近づいて來たことを知らせて居た。其の二匹は呆して、狐の待伏せて居る間隙を通つた。そこで狐は電光の如き速力を以て跳びつき、其の一匹を捕へて直ぐ殺した。其れから狐は其の獲物を啣へて歸る所であつたから、餘は一發の下に之れを止めて了つた。

以上はセイント・ジョンの觀察談のまゝを述べたものであるが、狐が兎を捕へる工夫の巧みなることは之れに據つて知れる、此の外に猶ほ同種類の觀察談は澤山あるが別に擧げる必要はない。

一九六 巧みに罠を免るゝ才智

狐は大に推理力の發達して居る動物であつて、罠を免るゝことは極めて巧みてある。如何なる種類の罠を用ひても、其れに二匹とかゝることは殆どない。狐の此の才智に就て、レーといふ人が寒帯地方に於て自から實驗した面白い實例があるので、ロマネーヌ氏は其れを著書のうちに掲げて居る。左に述ぶるものは即ち其れである。

嘗てレー氏は、寒帯地方の狐を捕へんとして、色々な種類の罠をかけて見た。併し狐は前の經驗に據つて皆之れを知つて居たので、何れも不成功であつた。そこで氏は其の地方の狐が未だ曾て知らない一種の罠を用ひた。其れは一方に餌を備へ、他の方には丸を込めた鐵砲を臺の上に載せて、其の餌の方へ口を向けて置き、其の間に絲を引き、而して狐が餌に觸れると同時に、鐵砲が鳴つて、自然に之れを殺す工夫であつた。此の装置をするには、鐵砲は餌から凡そ三十ヤードの距離に置き、

而して鈍砲のヒキガネと餌とを結び付けて居る絲は、殆ど全體雪の中に隠してあつた。

此の罌を用ひたら、狐を一匹殺すことは出来たが、併し二匹目は決して殺せなかつた。ところが餌だけは巧みに取つて行くのである。其れを取るには二つの方法があつた。一つはヒキガネの近所の顯はれて居る部分で其の絲を噛み切つて了ふ方法で、一つは鐵砲の丸の通る線と直角に、雪を通して穴を掘つて其の餌を取る方法である。後の方法に依ると、無論鐵砲は發火するが、併し狐は鼻の先きに微かな傷を受くる位で、餌を取ることが出来るのである。彼れらは此の二様の方法の何れかに依つて、巧みに餌を奪つて行つたので、ドンナにしても二匹目を捕へることが出来なかつたといふことである。

斯る工夫をするには、餘ほど高等なる推理作用を要する。殊に第二の方法、即ち鐵砲の丸の飛ぶ線と直角に穴を穿つて餌を取る工夫に至つては、其の考への進んで居

ることに驚かざるを得ない。此れは固より寒帯地の狐のことであるから、凡ての狐が皆斯うだといふことは出来ないが、併し兎に角、一般に斯る才智には長けて居るものゝやうに思はれる。

第四十八章 狼の心理

一九七 狼の才智

狼は狐と比較すると、其の知力は幾らか劣つて居るやうに見ゆる。又た其の知力の度を測定すべき材料も、甚だ乏しいのである。併し前に挙げたレー氏などの言ふ所によると、狼も狐の如く絲を切つて巧みに罌を免れ、餌を取つて行くといふことである。又た狼が獵夫の釣針に着けて居る餌を盗むことに就て、下に述ぶる如き話がある。此れはレー氏の言つて居る所であるが、併し自分は聞いたのみで、實際見たことはないと言つて居る。

一九八 狼の共同心

シユベリア湖に於て、漁夫が氷に穴を穿つて、其處から釣針を垂れて鱒を釣ることがある。漁夫は釣針を下げると、其の絲の一端を棒切に結び着け、其の棒切を氷の穴へ橋にかけて置いて他へ行つて了ふのである。然るに狼が之れを見て居て、漁夫が居なくなると、やつて来て、其の棒切を持ち挙げ、釣絲をタグつて、其の先に着いて居る餌を氷の上に引きあげ、其れを取つて食ふのである。但し此の湖水の鱒は大きいから、従つて其の餌も大きいのである。又た若し釣針に魚がかゝつて居れば、無論其れも奪つて行く。

此れに類した實例は猶ほ此の外にもあるが、併し別に珍らしい程のものはなし。狼の才智は大抵此の位のものかも知れない。

一九八 狼の共同心

狼には共同心があるので、羊などを捕へるに、二匹以上が共同して面白い謀計を

企つる場合がある。此の事に就いてエリオットといふ人の観察した事實があるから來れを下に述べる。

或時エリオット氏は狼が二匹並んで立つて居るのを見た。ところが間もなく、其の一匹は溝の中へ横臥し、他の一匹は平原を指して行つて了つた。然るに其の平原に鹿の群が立つて居たが、平原を指して行つた方の狼は、其の群の遙かに向ふ側へまで行つて、丁度牧羊犬が羊の群を追ふやうな工合に、其の鹿の群を己れの同僚の横臥して待伏せて居る方へ追つて來た。鹿の群は狼に追はれた爲めに、段々遁げて來て、其の溝を横ぎらんとするや否や、豫て待ち伏せて居た方の狼は忽ち跳び付いて一匹の鹿を捕へたといふことである。

一九八 狼の共同心

第十四編 犬の心理

第四十九章 其の總論

一九九 犬の心理的變化

犬は狼、狐、狸などと同一の科に屬する食肉類である。此の一科を指して、動物學上で犬科(Canidae)と稱するのであるが、其のうちて獨り犬のみは、歴史以前の時代から人間に飼養されて來たのである。此れは如何なる譯であつたか殆ど分らない。或學者は犬の知力が他の動物よりも自然に優つて居たからだと言ふが、人間に飼養されない以前に果して何うであつたか、其れは甚だ疑はしい。野生のままの状態から謂つたら、或は犬よりも狐や狼の方が伶俐であつたかも知れない。だから始めて犬が人間に飼養されるに至つたのは何ういふ譯であつたか確かには知れないのである。

である。

然るに犬は知れない昔から今日まで永い間人に飼養されて來て、絶えず人間に接し種々の教訓を受け、色々な目的に用ひられた爲めに、其の心理的性質は著るしく變化せられた。狼などの如くに猛惡な氣風や、獨立の習慣は殆どなくなり、全く人間に依頼して、よく其の命令に服従するものとなつた。又た其の知力は大に進歩して食肉類中の最高等に立つものとなつた。現在の所に於て、犬の心作用が狼や狐や狸などよりも遙かに上に立つて居るのは、要するに、犬が人間に飼養せられて種々の變化を受けた爲めである。

斯の如く犬の心理的性質の變化し、種々の特別なる習慣を具ふるに至つたのは、進化論の上から考へると甚だ面白いのである。斯る變化は悉く人間の必要に基いて起つて居る。換言すれば、人間が己れの必要通りに犬の性質を變化して來たのである。無論此れは永い間無意識的に變化させて來たのであるが、併し其の原因は全く

二〇〇 飼主に對する記憶

人間の力であつて、生物學で謂ふ所の『人為淘汰』である。一たび犬が人間に飼養されるに至つてより以來、絶えず人間の方が其の上に働き、而して今日見るが如き種々の心理的特質を生ずるに至つた譯である。

併し天然の性質や本能が全く無くなつたといふ譯ではなく、變化されずに残つて居るものもある。例へば、犬が月明の夜に吠へることは、何人もよく知つて居る所であるが、此れは狼や狐と同一の性質が猶ほ變ぜずに残つて居るのである。斯ういふ例を擧ぐれば猶ほ色々あるが、如何なる性質、本能が自然のままに残つて居るかといふに、人間の必要に關係のないものが自然のままに残つて居るらしく思はれる。之れ學理上から見て甚だ面白い點である。

第五十章 犬の記憶

二〇〇 飼主に對する記憶

犬が記憶のいゝことは何人もよく知つて居る所であるから、別に多くの實例を擧げて證明する必要はない。故に茲には其の最も確實なる事實を二つばかり述べたら充分であらうと思ふ。

ダーウインは自分の飼つて居た犬に就て自から實驗した所を述べて下の如く言つて居る。『余は嘗て性質の荒い、知らない人を嫌ふ犬を飼つて居た。余は五年間と二日不在であつて、歸つて來たときに、此の犬の記憶を試めて見た。余は其の犬の棲んで居る小屋の近所へ行つて、以前の通りの聲で呼んだ。ところが犬は別段嬉しい容子は示さなかつたが、併し其の聲を聞いて忽ち出て來て、余に従つた。而して其の有様は僅かに一時間位別れて居て會つたのと違はなかつた。』此れに據つて見ると、此の犬は五年以上確かに其の飼主を記憶して居たことは明かである。

二〇一 音響に關する記憶

二〇一 音響に關する記憶

1100 音響に関する記憶

一種の音響ヒヤウと或事柄とが、偶然犬の脳裡に於て聯合し、其の音響を聞くと忽ち其の事柄を想ひ出すやうになり、而して此の記憶の久しく續いて居たことに就て、ローマニース氏は左の如き自己の實驗を述べて居る。

犬が永い間記憶して居るのは、單に人や場所のみではない。余(ローマニース)は嘗て田舎に於て一匹の獵犬を飼つて居た。而して其の犬を數ヶ月間市街へ連れて行つて居たことがある。然るに市街に於ては、飼主の住所姓名を記した頸環なしに犬を外出させることは出来ないから、外へ出すときには必らず其の犬に頸環を箝めた。其の頸環にはチリ／＼鳴る小さい環が附いて居たが、犬は忽ち此の音と外出することとを聯想するやうになつて、其の音を聞くと直ぐ、外出の豫想を起した。其れから一たび田舎へ歸つて、三年の後に再び以前の市街へ其の犬を連れて行つた。ところが犬は、前に住んで居た家の隅々や、市街の路などを悉く記憶して居た。其れから又た余か前の頸環を持ち出したら、其のチリ／＼鳴る音を聞くと否や、大に喜んで前

の通り外出の豫想を起した。滿三年の間全く其の音を聞かずに居たのであるけれども、以前の記憶は其の音響と聯合して悉く残つて居たのである。

以上はローマニース氏の自から實驗して、之れを其の著書中に擧げて居る所であるが、此の一例に據つても、犬の記憶のいゝことは知れるのである。

第五十一章 犬の感情

1101 自尊の感情

犬は動物中で最も感情の發達して居るものであつて、此の點に於ては、猿の高等なるものと雖ども、其の下に立たざるを得ない。之れ一つは其の知力の進んで居ると又た一つは人間と絶えず親密なる關係に立つて居るのに由るものであらうと思ふ。

第一述べべきは、自尊の感情である。犬には自から己れを尊ぶ所の道德的感情が

二〇二 自尊の感情

あつて、己れが尊く見らるゝことを喜び、己れが賤しめらるゝことを甚だ不快に感ずるのである。固より此れは善く教養された高等なる犬にあるのみで、全く教訓を受けない劣等なる犬にはない。併し此の點は人間に於ても同様であつて、教育のない劣等の人間には自尊の感情といふやうなものは殆どない。

劣等な犬といへども、固より打たれることは嫌ふ、だが此れは打たれると直接に痛い爲めのみであつて、其の自分が賤められたことを感じて悲しむ爲めではない。然るに高等なる犬になると全く違つ居る。打たれた爲めに痛いといふことよりは打たるゝことに依つて自分が賤しめられて居るといふことを強く感ずるのである。是れ全く自尊の感情のある爲めである。斯の如き高等なる犬に於ては、懲罰の結果は劣等なる犬に於けるよりも餘ほど長く續くのである。劣等なる犬は打たれても忽ち忘れて了ふけれども、斯る高等なる犬になると容易に其れを忘れないやうである。

二〇三 感情の麗緻なること

高等なる犬は、其の感情が極めて麗緻(デリケート)である。だから唯だ一言臆かるか或は身振りて譴るやうな容子を見せれば、非常に強く其れに感ずるので、斯る犬に向つては打つやうなことは當に必要でないのみならず却つて有害である。ロマニースは之れに就て自から経験した左の如き事實を擧げて居る。

ロマニースは極めて伶俐な獵犬を飼つて居た。其の犬は毎日ロマニースの兄弟に伴れられて、公園を散歩する習慣になつて居て、其れを大に楽しみとして居た。然るに、或日其の犬は他の犬と共に公園に遊んで居たので、ロマニースの兄弟は其れを伴れて行かんとして手袋で打つた。ところが其の犬は大に驚き且つ憤つた容子で其の人の顔を見廻はし、暫らく考へて居たが、遂に家へ駆けて行つた。而して其の翌日は例の通り共に散歩に出かけたが、暫く行くと何か意味ありげに其の人の顔

二〇三 感情の麗緻なること

二〇三 感情の顯微なること

を見て、其れから又た家へ戻つて來た。一たび打たれた爲めに、斯の如く厭な氣持
ちを生じたので、其れから後は決して其の人に附いて行かなかつたさうである。

此の獵犬は、打つやうな形跡上の懲罰に就ては非常に嫌つて居た。管に自分に施
さるゝ場合のみならず、他の犬が斯る懲罰を受くる場合でも大に其れを嫌つた。若
しも人が犬を打つて居るやうなことがあれば、家の内外に拘はらず、必らず其の中
間にとび込んで、吠へたり、咬み附いたりして強制的に其れを妨げた。又た或時ロ
マニースは此の犬と共に馬車に乗つて行つたことがあるが、鞭で馬を打つ毎に、必
らず上衣コサツの裾を叩へて、其れを止めたといふことである。

ロマニースは、斯る犬に於ては、打たれたり、飢えさせられたりするよりも、愛し
ないと云ふ冷淡なる素振りが最も苦痛であると言つて居る。是れ即ち感情の極めて麗
緻なる所以であつて、野生の犬や、狼或は狐などに於ては決して見ざる感情上の特
質であらうと思ふ。

二〇四 競争及び嫉妬の情

犬には競争心が盛であつて、又た嫉妬の情が非常に強い。己れの見といへども既
に成長して自分よりも強くなつて來ると、其れと競争して負けることを嫌ふのであ
る。ロマニース氏は之れに就いて自から觀察した事實を擧げて居る。「余(ロマニ
ース)の嘗て飼つて居た獵犬は、其の見のまだ小さい時分には、大に苦心して其れに兎
を追ふことを教へ、而して之れを楽しみとして居た。然るに其の見が既に成長して親
よりも強く且つ速かに駆けるやうになつたら、其の容子は全く一變して了つた。俱に
兎を追つて居て、其の見に負けさうになると、何時もヤケになつて其の尾を捕へた」
又た犬の嫉妬心に就てはオールダムといふ人が面白い觀察をして居る。オールダ
ムの家に一匹の老犬が居た。其の老犬は歩くことも困難で、極めて不活潑になつて
居たのだが、其處へ新たに活潑な一匹の獵犬が加はつて、大に寵を受くることにな

二〇四 競争及び嫉妬の情

二〇五 正義の感情

つたところが、此の競争者の來た爲めに前の老犬の元氣は再び回復した。而して忽ち嫉妬の情を現はし、何時も其の犬のアトに付き廻つて、絶えず注意し、其の眞似をするやうになつた。若い犬のすることは、悉く自分も爲さんと努めた。以前には外出することを好まなかつたのだが、若い犬が外出すれば自分も必ず俱に出かけた。又た家の人に附いて一たび外へ出ても、若し若い犬が俱に行かなければ、忽ち家へ歸つた。又た以前には肉の外何も食はなかつたのだが、若い犬が貰ふものであれば、何でも之れを食ひ、若し若い犬が愛せられる様なことがあれば、大に嫉んで吠えたのである。

以上の事實は犬の嫉妬心の強いことを證して居る。猶は斯の如き實例は澤山あるが、一々擧ぐる必要はないから略する。

二〇五 正義の感情

嫉妬といふものは、大に進んだ感情であつて、自分の得んとする利益を他の者に専有されることを恐るゝ所から起るのである。而して此の感情が少しく變ずると、正義の感情となる。犬には正義の感情もあるので、其の飼主の處置が公平でないといふことは忽ち其の不正なることを發見して、之れを恨む傾向があると、ロマニース氏などは言つて居る。嫉妬と正義とは相近い感情であるから、或はさういふことがあるかも知れない。併し之れに就ては、未だ充分信據するに足るだけの觀察が施されて居ないから、吾人は此の感情のあることを主張することは出来ない。固より犬の正義といふことに關して世間に知られて居る話はあるが、併し其れらは學術上の材料となすには足りないのである。

二〇六 人を欺くこと

犬に人を欺く性質があるといふことに就ては色々な實例があるが、其のうちで

二〇六 人を欺くこと

マニースの自から観察した一つの事實を茲に擧げることにする。

ロマニースの飼つて居た獵犬は、窓で蠅を捕へることを面白がつて居た。而して捕りソコナツて笑はれると、大に困つた容子をした。或時ロマニースは之れを試めす爲めに、其の犬が蠅を捕りソコナフ毎に、非常に笑つて見た。ところが犬は捕りソコナツた時にも、其の唇や、舌や、頸で、本統に捕れたやうな振りをなし、さも誇りげにロマニースの顔を見上げた。而して其の容子の巧みなことは、其の蠅の猶ほ窓に留まつて居ることを見て居なければ、全く欺かれる程であつた。其れからロマニースは其の蠅に犬の注意を向けさせ、又た床の上に何も無いことを示した所が、犬は己れの欺りの看破されたことを知つて、忽ち家具の下に潜り込み、大に耻ぢ入つた容子であつた。

又た或人は犬の欺くことに就て面白い事實を擧げて居る。犬が足を傷けて暫らく跛になつて居たので、其の間は平生よりも特別に愛された。然るに二三ヶ月たつて

足の傷は全く回復したが、隠られるときには、何時も跛の真似をして、足が痛んで溜らない容子を示した。ところが遂に其の効のないことを知つたら、其れから全くしなくなつたといふことである。

二〇七 滑稽の感情

犬には幾らか滑稽の感情のあることも確かである。前節に述べたロマニースの犬は、氣持のいゝ時には、人を笑はす目的で、色々な滑稽なことを自から考へて行つた。例へば、横に臥て齒を露はし、一本の足を口の中へ入れるやうな事をやつた。斯ういふ時に、人が其れを見て大に笑つてやると、犬は其れほど喜ぶことはなく、又た知らない容子をして居ると大に拗ねたのである。然るに眞面目で何かして居るときに人が笑ふと、大に嫌ふのであるから、斯ういふことをするのは全く滑稽の目的であるといふことが知れる。

二〇八 互に觀念を通じ得ること

ダーウインも下の如く言つて居る。『犬には遊戯とは全く別に、確かに滑稽の感とも稱すべきものがある。若し棒切か何かを犬に投げてやると、其を啣へて少し遁げて行くことがある。而して其れを自分の前へ置き、平伏して人が取りに来るのを待つて居る。ところが人が其れを取りに行くと、ドッコイさうは行かないといふ容子で、忽ち啣へて遁げて了ふ。斯ることを屢々反復するので、其の稽滑を楽しむことが明かである。』

第五十二章 犬の知力

二〇八 互に觀念を通じ得ること

吾人は言語を以て互に觀念を通じ得るが犬には言語はない。併し犬も一種の方法に依つて、互に簡單なる觀念を通じ得ることは疑ひのない所である。如何なる方法に依るかといふに、身振りや鳴聲の調子とに依るのである。而して其の互に通じ得る

觀念は、『我れに附いて來』といふ位の甚だ簡單なる性質のものに過ぎないらしい。或學者は、犬は互に路を問ふたり答へたりする如き複雑なる觀念交通をなし得るやうに言つて居るけれども、併し其れに就ては未だ確かな實例を擧げて居る人はない。又た觀念を通ずるとき身振は何うであるかといふに、其れは場合に由つて少しは違ふこともあるが、大抵は互に頭と頭とをクツ着けて、擦れ合ふやうな又た衝き合ふやうな一種の動作をするのである。此れは通常遊び戯れて居るとき動作とは全く違ふのであつて、其の觀念交通の方法たることは一見して分かる。犬が互に簡單なる觀念を通じ得ることに就ては色々な實例がある。併し其れを一々茲に擧ぐる必要はないから、唯だロマニース氏の觀察した一つの事實を擧げることとする。

ロマニース氏の家に獵犬が親子居て、或日親の方は氏の部屋に眠つて居り、子の方は路傍の土手の上に横はつて居た。何時も此の小犬は獨りでは他の犬を侵襲しな

二〇九 人間に對して觀念或は欲望を通じ得ること

いが、親と一所になると闘ふことが非常に強かつた。

此の時大きな一匹の雜種犬が其の路を通つた。暫らくすると、親犬の方は眼を覺まして、急いで下へ降りて行つた。而して入口の處まで出て行つたら、小犬の方は其の側へ駆けて來て、前に述べたやうな身振りをした。そこで忽ち親犬の容子は變つて大に激した有様であつた。而して二匹ともに土手を飛び越へて、前の犬を追撃した。一マイル半ばかりの間、非常な勢ひで駆けて行つたといふことである。斯ることは、犬を飼つて居る人の時々目撃する所であらうと思ふが、其の一例に據つても、犬の間に觀念交通のあることは知れる。

二〇九 人間に對して觀念或は欲望を通じ得ること

ること

犬は互に觀念を通じ得るばかりでなく、又た人間に對して己れの觀念或は欲望を

通じ得ることもなし得るものである。此のことに就ても亦た澤山の實例がある。

レプロイといふ人は下の如き事實を報告して居る。氏の家に犬が一匹居て、其れに食物を與へたり、湯を使はせたりするのは下婢の役になつて居た。而して其の下婢は毎朝出て行つて山羊の乳を搾り、其れを犬に與へるのが例であつた。然るに或朝其の下婢は時間が少し早かつたので直ぐ山羊の乳を搾りに行かずに、何か針仕事を始めた。ところが犬は自分の出来るだけの方法を盡して、下婢の注意を促がし、乳を搾りに引き出さんと努めた。而して自分が何時も用ひて居る食器を啣へて來て、下婢の足許へ置いたといふことである。

又たベインズといふ人は次の如き事實を観察して居る。氏の居間に犬の水鉢が備へてあつて、犬は何時も其處へ來て水を飲むことになつて居た。然るに時々其の鉢に水のなくなつたのを知らずに居ることがある。其の時には、犬は必らず前足を以て鉢を掻き、水を呉れといふ注意を促がしたさうである。

二〇九 人間に對して觀念或は欲望を通じ得ること